

第IV章

楽園移住者のリキッド・ホーム



本章の主題は、民族誌的記述を通して観光の主体の広がりやを再把握することにある。記述の具体的対象は、楽園観光地バリ島のウブドにおける日本人中長期在住者であり、とくに彼らが1990年代末以降に観光のリスクに直面する様子を、「リキッド・ホーム」概念とライフスタイル移住論とを組み合わせた視点から捉えようとする。本章の議論からは、観光のリスクに直面するそうした主体を捉える上でのひとつの理論的可能性を導き出すことができるが、それについては結章であらためて論じることとする。なお、本章は、拙論（吉田 2019b）にその後の若干の民族誌データを追補し、加筆・修正したものである。

第1節 リキッド・ホームとライフスタイル移住論

本節では、本章の理論的枠組みを明確にするとともに、記述対象を画定することとする。

(1) リキッド・ホーム

序言で触れたように、バブル経済がはじけた後の日本社会では、長期にわたる経済停滞、非正規雇用の拡大、離婚率・生涯未婚率・高齢化率の上昇と出生率の低下、貧困層の拡大ないし顕在化、などが進行していった。災害やDVによる長期避難生活を余儀なくされる人々もいる。もちろん、さまざまなリスクや危機に直面しているのは日本人だけではない。広く現代社会に生きる人々にとって、家族や家庭が自明のものではなくなっている（ex. 阿部 2002, 2008, 2011, 2014; 本田 2014, 2020; 小杉・宮本（編）2015; 丸山（編）2018; 宮本 2012; 中川 2018; 西澤 2010, 2019; 橋木・浦川 2006; 山田 2013, 2021）。

ここでいう「ホーム」は、家族や家庭から故郷そして本国にまで広がる、居心地よい安らぎの居場所や帰還のトポスである。それは、所与のものではなく、当事者自身が見出しつくり出すものである。ただ、リスク社会化した現代では、液状性と可動性の高まりが生とアイデンティティのあり方に絶えず再構築ないし脱構築を迫っており、親密圏と公共圏の境界が流動化する中で、ホームに相当する生活の場は、過度の合理化や管理社会化による切り崩しを受け、かならずしも確たる安らぎの——ギデنزがいう「存在論的安心」をもたらず——場所ではなくなっている。ベック夫妻は、チェルノブイリ原発事故後の世界において他者というカテゴリーは終焉したと述べた。もちろん、紛争や国境問題などに照らせば、他者というカテゴリーが意味を喪失したとはいえない。そもそも「他者」とは「自己」との対概念であって、「自己」が有意味であるかぎり、「他者」のみが意味を失うことはありえない。むしろ、他者と自己との境界が流動化・液状化し、それに連動して内なるホームと外なるアウェイとの境界も流動化・液状化しているのが現代なのである。たとえば、シリア難民やロヒンギャにとっては、未到達のアウェイの地こそホームたるべき場所である。ウクライナ戦争以降に海外に移住したロシア人の大半にとって、ホームたるべき場所は紛れもなくロシアにほかならないが、リモートワークの浸透と徴兵への懸念などから、彼らは、一時的にせよ家族・親族のいる祖国の地を離れて、かりそめの相対的に安住できる地を模索せざるを得ないのである¹。20世紀半ばには核家族普遍説が議論的となったが、いまや家族というホームの普遍性自体が

¹ 2023年3月初旬時点で、ロシアを中心とした東欧系のバリ島中長期滞在者は数万人、一説には9万人とも聞く。ウブド近郊のある集落では、2018年に田畑を平らげ着工された巨大な観光施設が2022年に稼働し、富裕層を中心とした東欧系中長期滞在者が集住して、閑静であった集落が喧騒に包まれるようにもなった。バリの一部地域では、他地域に先行された開発を一挙に前に進めようとする危うい観光資本・観光者誘致が、コロナ禍中の経済の疲弊を受けて展開し、後戻りできない社会環境破壊がもたらされる懸念がある。

論議されてしかるべき現実の一端がある。こうしたホームの液状化を、オジェは「非一場所」の増殖として主題化し、伊豫谷は「故郷」の喪失、「居場所」の崩壊、国民国家の溶解、自らの帰るべき場所の喪失などと切り分けて論じた (Augé 2017(1992): 104-106, 121-125; Bauman 2001(2000), 2012(2006); Bauman & May 2016(2001): 206-213; Beck & Beck-Gernsheim 2014(2011): 116, 2022(2001); Benson & Osbaldiston 2014b: 4-5; Bruder 2018(2017); Cliford 2002(1997): 15-17; Deleuze 2007(1990); Easthope 2009; 江原 2022; Elliott & Urry 2016(2010): 4-10, 122-130; Giddens 2001(1999), 2005(1991): 38-60; Habermas 1987(1981), 1994(1990/1962); 五十嵐 2022; 伊豫谷 2013(編), 2014a: 7, 2014b: 306, 309-310, 321, 2021: 142-159; Kaplan 2003(1996); Krastev 2018(2017); 村武(編) 1981; Murdock 1978(1949); 内藤 2020; 中森 2017; 中西 2021; 中坪 2019; Urry 2014(2003), 2015(2007))。

バウマンを参照していえば、現代人は、落ち着くことのできる居場所の喪失に直面しており、居場所に相当するものがどこにもあるかのようであり、十全なものとしてはどこにも見出せなくなっている。われわれは、たしかなものとはいえない複数のアイデンティティと複数の居場所とともに生きざるをえない。だからこそ、安らぎのホームを想像し熱望するのである。本章では、現代のリスク社会における「ホーム」を、想像の次元にあって希求される、だが捕まえようとしてもすり抜けていくことがある、安らぎの居場所／帰還のトポスと捉えることにしたい。バウマンがいうリキッド・ライフを、当事者たちはソリッドに、つまりはしっかりと、生きようとするが、その企図や理想がかならず成就するとはかぎらない。再帰的近代化し世界リスク社会化する現代において、定着と非定着、停留と移動、定住と移住、帰還と出発といった概念の間に明確な境界線を引くことはますます困難になっている (Bauman 2007(2004): 38-39, 2008a(2001): 206-208; Cohen, Duncan & Thulemark 2016(2013): 1-6; 伊豫谷 2014a: 6-8; 齋藤剛 2018; 吉田 2022b; cf. Bollnow 1978(1963): 57, 89-92, 130-131)。ここでいう「リキッド・ホーム」は、アウェイと溶け合いつつ液状化（さらには気体化／希薄化）したホームのあり方を指し示す概念である。

卑近な例を挙げよう。日本の大都市圏に暮らす人々の中には、10キロメートルほど離れた仮の住まいと職場や学校との間を毎日往復し、月に1度は300キロメートル離れたところにある家族の住む自宅に帰り、年に1～2度は1000キロメートル離れた故郷にある実家に帰省する、という人々が一定数いる。その場合、彼らにとって「ホーム」と呼べるものは複数あることになる。これは、エリオットとアーリがいう「モバイル・ライフ」の具体でもある (Elliott & Urry 2016(2010): 33-37, 113-116)。

ただ、アーリらは、他者からみれば「ホーム」にみえるであろうものが、当人にとっては実はそうではない状況もありうるという、現実の相互主観的で多元的な意味構成には注目しようとなしない。しかし、現代人にとってのホームを論じる上では、むしろここに留意すべきであると私は考える。たとえば、毎朝出発し夜戻るひとり暮らしのアパートは、居心地のよい我が家には到底感じられないかもしれない。たがいの愛情や親密性が希薄化した配偶者や子が待つ家への毎月の帰宅は、温かい家庭への帰還ではなく、冷たいアウェイの戦場への到着であるかもしれない。そして、そうした日々の疲労とストレスに耐える彼女や彼が心から「ホームに帰った」と実感できる場所は、盆暮に訪れる年老いた親と先祖の墓が待つ田舎ではなく、数日の休暇を年に1～2度取って訪れる南の島の「楽園」であるかもしれない。他者からみれば家庭や故郷とは無関係の、生まれや育ちにまったく無縁の、遠く離れた青い海とヤシの木の島こそ、心身をリフレッシュできる安らぎのホームであるという人々は、日本の内にも外にもいる。ただし、リキッド・モダニティにおけるリキッド・ホームは、主体によって実に多様かつ複合的であって、そのあり方を何らかの典型的なパターンや核心的特徴に還元して把握することは、おそらくできない。それにアプローチする方法は、周

縁的とされる事例を含めた記述を積み重ねることしかないはずである。

ここで、現代社会のメカニズムと「楽園」をもとめる観光との関係について、あらためて簡単に整理しておきたい。リスク社会化と管理社会化・監視文化化の進む現代において、人々は心身の疲労を回復させたり気分転換をはかったりすることで健康を維持しなければならないというイデオロギーとハビトゥスを内面化するようになった。そして、リクリエーション活動に並々ならぬ関心を向けるようになった。飲酒、賭博、性サービスの享受など、以前から男性をおもな主体として存在した享樂的行為は、かならずしも衰退しているわけではないが、心身の健全さを増進させるという観点からすれば、決して好ましいものではない。むしろ、スポーツ、運動、読書、芸術などが、余暇を過ごす趣味の候補としては選好される。こうして、ある程度の経済的そして時間的余裕を有する人々を中心に、特定の趣味に時間をかける余暇活動＝消費活動が興隆し、それがさらなるサービス産業の伸長をもたらすという円環が成立し、社会の中に浸透していった。日常生活から離れた場所に一時的に赴く観光は、日々の生活のストレスを解放し心身をリフレッシュする上で概して肯定的に評価される余暇活動のひとつである。その観光の1形態として、生活圏の彼方にある「楽園」に癒しをもとめる楽園観光がある（序章第1節）。楽園観光は、時空間の圧縮、リスク社会化、心身の健康の管理化をかつてないまで高めた現代に発展した観光形態である（Elliott & Urry 2016(2010): 122-130; Lyon 2002(2001), 2019(2018); 三上 2010, 2013; 美馬 2012: 41, 43, 60-67; Rose 1998(1992): 2-4; 山下 2006; 吉田 2013b, 2020a）。

リキッド・ライフとモバイル・ライフの全盛時代、観光は、地縁・血縁・出生等にもとづくのではなく、イメージと記号にもとづき希求されるホームという新たな選択肢を、人々に追加した。こうして、現代人のホームの多様性・多数性・流動性・液状性はより高まった。ただ、恵まれた人々が複数あるホームでの豊かさ・安らぎを享受しうる一方で、安心できるホームや居場所をもとめてもひとつとして得られない人々は多数存在する²。その差異や格差を念頭におきつつ、本章では、楽園バリの観光地ウブドの事例にアプローチしようとする。

(2) ライフスタイル移住論

近年の社会学では、「ライフサイクル」論から「ライフコース」論への組み換えが進んでいる。ライフサイクル論は、結婚・子育て・子離れといった一連のサイクルを各人・各家族がたどるといって枠組みに依拠していた。しかし、結婚や離婚の有無、子の有無、高齢期の寿命の長短など、各々の差異が顕著になってきた今日、人々の一生を共通の枠組みから把握することは困難になっている。ライフコース論では、長さも平坦さも異なるそれぞれの道のりを各人が歩むのが人生であると捉える。一定の理念や理想が共有される一方で、各人が歩む具体的な生は多様化し流動化している。それゆえ、現代では「自分探し」が人々の主題ともなっている。しかし、自分探しが、リキッド・モダニティにおける不安定で不安な生（リキッド・ライフ）に確実性を付与してくれるわけではない。現代は自己決定・自己責任を強いられる社会でもあるからである。バウマンは、リキッド・ライフは消費する生であり、自己言及・自己批判の生であると述べる。いくら消費に耽溺しても、満足できないその不満を糧に、各自のリキッド・ライフは展開しあるいは漂流するのである（Bauman 2008b(2005): 8, 20-25; 藤村 2013: 72-74, 87-95; 神林 2021; 香山 2021; 吉川 2019b(2001);

² バウマンは現代の難民や移民を念頭において論じているが、自らが望むホームをもたない人々、あるいはホームから排除されて生きる人々は、ローカルな共同体社会の中にも存在する。たとえば、現代沖縄の例については、打越や上間らがこれを主題化している（岸・打越・上原・上間 2020; 打越 2014, 2019; 上間 2017）。

間々田 2007, 2016; 中井 2011; 白波瀬 2009: 17-18, 2010; 白波瀬・石田 2018)。

このライフコース論と観光論とを媒介する研究として、ライフスタイル移住論がある (ex. Benson 2014(2011); Benson & O'Reilly (ed.) 2016(2009); Benson & Osbaldiston (ed.) 2014a; 藤田 2008; Hamano 2010, 浜野 2014; Hayes 2018; Janoschka & Haas (ed.) 2017a(2014); 加藤 2009; 長友 2013; O'Reilly & Benson 2016(2009): 10-11; 佐藤真 1993; Wohlfart 2017; 吉原 2016b)。従来の移住者・移民研究は、政治的・経済的な理由から移住を余儀なくされる集団をおもな対象とする傾向があった。しかし、先行研究における「移住者」や「移民」は、植民、難民、出稼ぎ者、留学者などを含み、研究者によりその定義や範疇も異なっていた。さらに、グローバル化の進む現代では、中間層に当たる人々が、よりよい生活の質、教育環境・住環境、自分らしい生き方などをもとめて、ウェブサイトの情報やLCCなども駆使しつつ、個人化したかたちで、多様な形態の移住をするようになった。後者のような現象に着目し、幅広く移住・移動を捉えようとするのがライフスタイル移住論である。序章第3節で触れたように、ライフスタイル移住は、観光という非日常が移住生活という日常と溶け合うあり方を捉えた理念型でもある。

ライフスタイル移住論では、「移住」を定住から移動まで幅広く含む概念として設定し、長期滞在や旅行といった概念から明確に区別しない。バリの観光地に生きる日本人のような「異郷人」(序章第5節)を、相互主観的な意味の理解を志向する立場から考察しようとする場合(序章第4節・第1章第4節第2項)、「移住」を長期滞在から比較的短い旅行まで、また定住から移動までの幅の中で捉える視点は有効である³(藤田 2008: 23-25; Haans, Janoschka & Rodriguez 2017(2014): 208, 210; Janoschka & Haas 2017b(2014): 1-2; Korpela 2016(2009): 27; 森本・森茂 2018; 長友 2013: 14-32, 139-145, 2017: 128-129; cf. Cohen 2011; Cohen, Duncan & Thulemark 2016(2013): 1-8; Hayes 2018; 伊豫谷 2014a, 2014b; O'Reilly 2003)。

ライフスタイル移住研究を取り込んだ視点からバリ在住日本人を主題とした先行研究としては、バリ人と結婚した女性におもに焦点を当てた、山下や吉原らの議論がある(山下 2009: 31-36; 吉原(編) 2008; 吉原・センドラ・ブディアナ 2009; 吉原・今野・松本(編) 2016)。たとえば、吉原は、「移民の社会学」を志向しつつ、コミュニティ論やネットワーク論を主題の中心に据えようとする(吉原 2016a: 12)。一方、本章では、コミュニティではなくホームを主題とし、ホームとアウェイ、停留・定住と移動・移住との間の線引きが困難であり、かつ個人化した現代社会に生きる人々の、ホームのゆらぎや多様性を捉えようとする立場に立つ。このように、本章の関心は、現代のリスク社会に生きる人々がソリッド・ホームをもとめながらも、ときにリキッド・ホームに生きざるをえない実態を捉えることにある⁴。別言すれば、ライフスタイル移住者がその生を謳歌する局面ではなく、リスク社会の中で翻弄されるその生の脆弱性に、むしろ着目しようとするのである。

³ 本章で取り上げるウブドの日本人移住者の事例では、「居場所をもとめる」という認識や心情は大なり小なりあっても、移住者としての自己認識は総じて希薄であると感じられる。それは、彼らが、当初の予定になかった移住に結果的に踏み込んでいったからでもあり、バリやウブドの人・文化・風土に一定の愛情を抱き、ホームと感じて住むにいたったからでもある、と考えられる。経済的合理性は、概して彼らの移住の二義的な動機と考えてよい。

⁴ ライフスタイル移住論は、リキッド・モダニティ、個人化、移住者の階級認識、アイデンティティの複合化、現地の人々との軋轢などに論及するものの(Benson & Osbaldiston 2014b: 13-15; Janoschka & Haas 2017b(2014); O'Reilly & Benson 2016(2009))、管理社会論・監視文化論やリスク社会論との接合可能性に関する議論を十分展開してはいない(cf. Benson 2014(2011); Korpela 2014: 13-15; Salazar 2014: 133-134)。だが、観光者が主体的に観光を楽しむその背後に、心身のリフレッシュを強いる生権力と自己管理の社会メカニズムがあるように(序言・第1章第3節第3項)、ライフスタイル移住興隆の背後にも、安らぎのホームでよりよき生を生きる選択を強いる生権力の支配構造があると、私は考える。

(3) 記述対象の絞り込み

ここまで、本節では、議論の視点に寄与する2つの切り口について確認してきた。以上を踏まえつつ、具体的な記述対象を絞り込んでおくことにしたい。

本章で取り上げるのは、インドネシアのバリ島中部の観光地ウブドを拠点とする日本人移住者である。ここでいう「日本人」には、結婚後インドネシア国籍に変更した者や、アイデンティティの面で日伊両属的な者も含まれる。日本国籍者の在留資格も、家族ビザ、就労ビザ、リタイアメントビザ、各種の中短期の滞在ビザなど、さまざまである⁵ (<https://www.umaumabali.com/post/bali-visa>)。バリ人と結婚してヒンドゥーに改宗し、死後は集落で火葬してもらう予定の日本国籍者やインドネシア国籍者もいれば、終の棲家をまだ決めあぐねている者もいる。彼らの滞在期間やそのライフスタイルはさまざまであり、とてもひと括りにして捉えることはできない。ただ、おおむね、彼らは、経済・物質面で豊かであっても精神面で疲労する日本での生よりも、あくせくしないのんびりしたバリ人的な生き方——彼ら自身はそう認識しているということである——に魅力を感じ、バリでの生活を選択したということはいえる。第I章第3節第3項で触れたS氏も、バリをホームとみなす日本人のひとりである。彼は、ウブド郊外のホテルと年間90日宿泊できる10年単位の契約を結ぶなどし、コロナ禍前は毎年バリを訪れてバリ滞在を享受するとともに、退職後の移住について検討してきた。2022年3月に63歳で定年退職した後、同年5月に久しぶりにバリに行き、その後は当面中期（数カ月程度）のバリ滞在を予定している彼を、ライフスタイル移住者の周縁に位置する存在と捉えることができる。S氏は、定年前に日本での職を切り上げてバリ移住に踏み出すことはなかったが、中には、バリ好きが高じて、日本での職を捨ててウブドに生活の拠点を移した者、そしてここで観光者相手のビジネスをはじめた者もいる。

彼ら移住者にとって、ウブドはかけがえのない居場所であるが（吉田 2013b: 267）、ウブドやバリがホームであり日本がアウェイである、という単純な割り振りをすることはできない。彼らは、ウブドをホームとみなしバリ人的なライフスタイルにシンパシーを感じながらも、日本人としてのアイデンティティやライフスタイルをまったく放棄したわけではなく、潜在的に日本をいつかは帰るかもしれないホームとして残しつつづけている。また、実際、頻度・期間はさまざまであるものの、日本に一時的に帰っていてもいる。彼らは、どの程度意識的かはともかく、「日本人としてウブドに生きる」というアンビヴァレントなライフスタイルを選択したのである。むろん、これはやや単純化した理念型である。ウブド在住日本人を見渡せば、その具体的な生は、ほとんどバリ人のよう



写真4-1 火葬の最終準備（2023年3月）

ウブドでは、火葬の際、遺体を納めて火葬場に運ぶ塔状の台に加え、牛などの動物を象った張り子を用意し、これに遺体を移して焼くことがおおいが、この火葬では、張り子はなく、塔状の屋根もない、比較的シンプルな形態を選択した（cf. 吉田 2021: 119-120）。火葬当日の朝、病院から遺体を運び込み、屋敷内で儀礼をする間に、最後の飾り付けを集落の人が行っている。この後墓地に運び、清めてから荼毘に付す。

⁵ インドネシア政府は、2022年10月にセカンドホームビザ（Visa Rumah Kedua）を新たに立ち上げると発表した（<https://www.umaumabali.com/post/2nd-home-visa>）。2022年末からオンラインでの申請受付をはじめている。

にウブドに暮らすという極と、バリ人的な生のあり方をほとんど取り入れず、短期訪れる日本人観光者のようにウブドに暮らす——それゆえインドネシア語やバリ語での会話に苦労する——という極との間の、相当な幅の中にある。また、ウブド移住後も中長期的に日本で暮らす期間を有する者もあり、この2つの極の間、またウブドと日本という2つのホーム（場合によっては他のホームも）の間を、行き来するというタイプの者もいる。さらに、落ち着いたウブドでの末永い暮らしを思い描きながらも、ホーム選択がゆれている者もいる。彼らは、定住と移動の間、国籍やアイデンティティの面で日本とバリの間、そして楽園イメージと現実のバリ社会とのほさまに、生きている（吉田 2013b, 2019b, 2021c: 173–175; cf. Benson 2014 (2011); Benson & Osbaldiston 2014b: 15–16; O'Reilly & Benson 2016 (2009): 3, 9）。

本章では、この相当な幅そしてゆれのある彼らの生き方の一端ないし断面を、1990年代のバリ観光の右肩上がりの時代に移住を決意または試行した人々の中から、数名の人々に焦点を当てて記述する。いずれも、私が30年近く継続的に接し、インタビューしてきた方々であり、バリ人やインドネシア人と必要な会話を交わせる程度のインドネシア語（人によってはバリ語も）を身につけている。彼らは、当初観光者としてバリを訪れ、「楽園バリ」に惹かれ、バリに長く滞在するようになった。そして、N氏をのぞき、90年代末のインドネシア通貨危機、その後の民主化などの社会変動、2000年代の2度のバリ島クタでの爆弾テロ事件とリーマンショックなど、約10年にわたるバリ観光の数度の浮き沈み、2010年代の物価の高騰と日本人観光者の減少、そして2020年からのコロナ禍による観光者不在状況、などに直面してきた（吉田 2004, 2009, 2013b, 2020a, 2021c）。

本章の記述は、バリやウブドに在住する日本人の典型的なあり方を提示しようとするものではなく、その具体的なあり方の一端を個性記述的な民族誌的研究として示そうとするものである。繰り返しになるが、ウブドの日本人移住者たちの生は相当な幅の中にある。そもそも、彼らはそれぞれの事情で別々にウブドという観光地に居場所を見出し移住したのであって、一部の人々はたがいの人間関係のネットワークにまったく入っておらず、その社会的連帯にも相当な濃淡の幅がある。本章は、そうした個人化の様相を一部に強くもつ、彼らの中の一部の人々のライフスタイルやホームのあり方の一断面を、その背景にあるウブドというグローバルな観光地がもつ特徴やメカニズムに照らしつつ記述することに専念する。ただし、そうした個性記述的な民族誌的研究から、一定の論点を抽出することは可能であると考えられる。

以下、第2節では、バリとウブドを概観するとともに、1990年代以降のバリ観光について述べる。第3節では、ウブドの日本人ライフスタイル移住者の数人の状況を記述する。そして第4節では、観光リスク論的観点から議論のポイントを確認し総括する。

なお、本章では、個人の私的領域に関わる部分にも若干言及する。プライベートなものはパブリックなものとおなじく社会的事実である。しかし、その取り扱いには慎重な配慮が必要である。読者においては、プライバシーの保護と尊重に極力配慮して、以下をお読みいただきたいと願う次第である。

第2節 熱帯の楽園の観光の危機

(1) バリ観光の概要

バリは、インドネシア随一の、また東南アジア有数の、国際的な観光地である。2000年代からは国内観光者も伸長し、バリの観光経済を支えるようになった。バリ州知事が2011年に表明した、2015年までに外国人観光者500万人・国内観光者1000万人という目標は達成できなかったものの、

国内外の観光者1000万人超をこの2015年に受け入れるにいたったバリは、現地の人々が好むと好まざるとにかかわらず、観光に深く規定され依存する社会となっている (Byczek 2010: 57-58; Cuthbert 2015: 338; 吉田 2020a, 2021a)。

バリの観光地化は、オランダ植民地支配下の20世紀前半にはじまった。その起点にあったのは、バリを「楽園」とみなす欧米人のオリエンタリスティックでロマンティシズムあふれるまなざしであった。1914年に、オランダ王立郵船会社 (KPM) は、はじめてバリを東インド観光の広告パンフレットに盛り込んだ。KPMが作成するその種のパンフレットやガイドブックには、いずれも、熱帯の森・ヤシの木・水田の風景などの写真とともに、次のような文言が使われていた。「バリ／あなたはこの島を立ち去るとき、悲しみのため息をつくでしょう／あなたはずっとずっと、このエデンの園を忘れられない」 (Vickers 2000 (1989): 147, 2013: 20; 吉田 2005a, 2013b, 2020a, 2021c)。

KPMは、1924年にバリを含むオランダ領東インド諸島の主要なスポットを周遊する観光目的の定期船を就航させ、バリ島内での観光事業も展開していった。こうして定着したバリ島ツアーの基本は、湖・火口・村落などの自然や景観の観賞と、王宮・寺院・古代遺跡を見学する文化観光とを組み合わせたものであり、植民地政府が伝統文化の保存の観点から奨励した絵画や彫刻が、観光者の買うみやげ物として人気を集めた。また、ガムラン音楽と舞踊や演劇などの観光者向けのライブショーも、1920年代末には定着した。今日バリでみられる、観光者向けの芸能 (音楽、舞踊、劇) や美術工芸品 (絵画、彫刻) の原型は、この時代にさかのぼる。1927年からは火葬見学ツアーもはじまった。現在のバリ観光では、ダイビングやサーフィンなどのマリンスポーツ、ハワイ型のリゾート観光、そして文化体験・自然体験・エコツアーなどが新たに付け加わっており、それに関連して新たな観光地も開発されているが、植民地時代のバリ観光の諸形態は、基本的にいまに引き継がれている (Hitchcock & Putra 2007: 15; 永渕 1998: 67-82; Vickers 2000 (1989): 149-157; 吉田 2013b, 2021c; 吉田 禎 (編) 1992: 32)。

バリの楽園観光地化の経緯やその特徴については、拙論で詳述した (吉田 1997, 2013b, 2020a, 2021c)。ここでは、①戦後の大衆観光時代におけるバリの観光地化が「開発独裁」とも呼ばれたスハルト政権の時代に進んだこと、②空港や州都デンパサル (Denpasar) に近い南部の海岸部に位置する、サヌール (Sanur)、クタ (Kuta)、ヌサドゥア (Nusa Dua) とその周辺地域が、大型資本の継続的な投下を受け観光のコアエリアとなったこと、③一方、内陸部にあるウブド、東部のチャンディダサ (Candi Dasa)、北部のロヴィナ (Lovina) などのいわば周辺部の観光地化は、南部主要観光地にやや遅れて1980年代以降に進んだものの、大型資本の介在があまりなくローカルで中小規模のビジネスが中心という特徴をいまも有すること、④1990年代には、インドネシア政府の規制緩和・地方分権化政策を背景に、これら中心部・周辺部の既存観光地の周辺地域に、広大な土地を確保した豪華なホテルや複合リゾート施設の建設が進み、自然体験型観光やエコツーリズムなど、従来の文化観光に機軸をおいた観光とは異なる観光形態も伸長したこと、の4点を指摘するととどめておく (吉田 2020a: 219-234, 2021c: 137-147)。では、以上を踏まえ、観光地ウブドに目を向けることにしよう。

(2) 観光地ウブドの概要

ウブドという観光地は、ギャニヤール県ウブド郡のウブド行政村 (Kelurahan Ubud) の中心部、およそ10集落にわたる観光関連施設の集在地域に広がる。本章では、これを「観光地ウブド」あるいは単に「ウブド」と呼ぶことにする。ウブド行政村の周辺には、プリアタン (Peliatan)、ベネスタナン (Penestanan)、プゴセカン (Pengosekan)、ニュークニン (Nyuh Kuning)、トゥガランタ

ン（Tegallantang）など、観光地化した／しつつある村々が展開している。以下では、これを「ウブド周辺地域」と総称することにする。

植民地時代に芸術のセンターとしての評価を得ていたウブドの本格的な観光地化は、1980年代からである。ウブド王宮の成員が中心となって、バリの文化を保存・発展させつつ観光振興をはかることを目的とした観光財団が設立され、オーストラリア人と王宮との共同経営によるホテルが開業し、南部の海岸リゾートにはない田園風景とバリの芸術文化の魅力を、旅行代理店を通してアピールするようになった。その後、ウブドやその周辺地域におおくの宿泊施設や飲食店などが開業していき、ここに滞在する観光者も増えていった。このように、ウブドでは、王宮の深い関与と小規模な外国人資本の介在を梃子にしつつ、政府主導のトップダウン型の開発ではなく、地元のボトムアップの取り組みの集積によって、観光地化が進められてきた（Lewis & Lewis 2009: 32; MacRae 1997: 25-62, 111, 414-415, 1999: 132, 135-139; Vickers 2011: 462, 466, 472, 477; 吉田 2013a, 2013b, 2020a）。

ウブドは、田園・ヤシの木・森といった景観と舞踊・絵画・彫刻などのバリの芸術からなる自然・文化両面を合わせたバリらしさ、つまりは植民地時代に形成された「楽園バリ」のイメージを醸し出す雰囲気、売り物とする観光地である。ウブドと周辺地域には、宿泊施設・飲食店・みやげ物店などとともに、絵画や彫刻を展示・販売するギャラリーが立ち並び、王宮や寺院ではガムラン音楽・舞踊のショーが毎夜繰り広げられ、芸術文化の観光地としての面目躍如たるところを示している。内陸に位置するウブドは、海岸部より涼しく過ごしやすい。この点で、ハワイ型のリゾートを模倣して開発された南部コアエリアの観光地とは趣が異なるところをもつ。1990年代前半からは宿泊施設や飲食店などがさらに増加し、道路が拡張・整備されるなど、観光地としての利便性も整えられた。また、このころから小規模な体験型観光やエコツーリズムの拠点という性格も強め、芸術文化や景観の鑑賞よりも、自然体験観光や内陸部でのリラクゼーションをもとめる観光者が増加した。ただし、この自然体験型観光の興隆は、バリ島観光開発のさらなる周縁地域への浸透やそれに伴う虫食い状の乱開発と、軌を一にしていた。ウブドでは、斬新なデザインや自然素材の現代的あるいはポストモダン的な商品などを提供する新たな店舗も増えていった。グローバルな観光インフラの導入がローカルな文化や自然と融合した、グローバルな観光地として市場の中にポジションを獲得してきたウブドは、かつての楽園のイメージをなおかろうじてとどめつつ、世界のどこにでもあるシミュラークルとしての楽園観光地への転換を果たしつつある（Baudrillard 1984



写真4-2 ウブドの老舗店舗



写真4-3 ウブド王宮を訪れる観光者

ウブド最初のアートショップは1950年代に開業した。写真4-2のNomadという飲食店はその後継店舗である（Vickers 2011: 466）。写真4-3は、観光スポットでもあるウブド王宮の前庭である。コロナ禍前から、中国・台湾・インドなどのアジア系観光者が増加傾向にある一方で、かつておこった日本人観光者をあまり見かけなくなった。

(1981), 1995(1970); MacRae 1999; 吉田 2013a, 2013b, 2016a, 2020a, 2020b, 2021c)。

現在、ウブド中心部では田園や森林の景観はもはや失われており、これに重きをおく観光者はウブド周辺地域の村々に滞在している。政府の規制緩和方針を受け、ウブド周辺地域にも広大な土地を確保した大型の観光施設がいくつも建設されたことは先述した。一方、ウブド中心部に国内外の大型資本はあまり入っていない。その最大の理由は、所有者が土地を売らず、自身の経営か、比較的短期の賃貸による利益の獲得を好むことにある。その賃貸料は、インドネシア通貨危機（1997年）、バリ島クタでのテロ事件（2002年、2005年）、リーマンショック（2008年）といった危機を経ながらもほぼつねに上昇をつづけ、場所そして契約者にもよるが、数年で倍となる程度の上げ幅を繰り返した（2022年4月までのコロナ禍中においては、さすがに下落したと聞くが）。ただし、それら店舗が立地する場所の大半は、住民たちの屋敷地の道路に面した一角や、比較的ちいさな田畑や空き地であったところである。南部のクタやサヌールでは、海岸部など集落の外に観光エリアが展開していった経緯もあり、その種のこま切れに近い土地が法外といってよい高値で転売され、まとまった塊となって大型の観光施設が建設されるという事態が進行したが、ウブド中心部でそれ



写真4-4 川辺のコテージ風宿泊施設

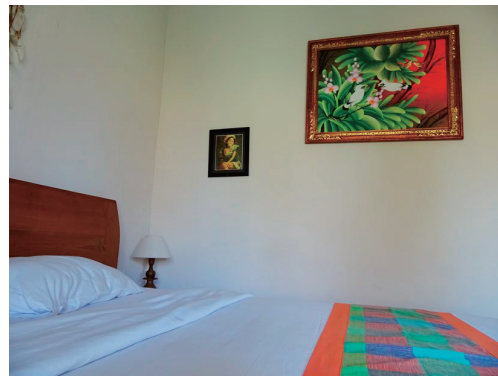


写真4-5 ゲストハウスの室内

ウブドには、1泊1000ドル以上的高级ホテルから1泊20ドル未満の安宿まで、さまざまなタイプやクラスの宿泊施設がある。2023年3月時点で、中級クラスは1泊40～50ドル程度である。現在、ほとんどの宿泊施設はインターネットで予約可能である。写真4-5は、1泊約30ドルの、中級ないし中の下クラスのゲストハウスの内装である。この宿泊施設は4部屋からなり、各部屋はいずれも面積約20㎡、クイーンサイズまたはツインのベッド、シャワールームがあり、朝食付きである。バリ絵画を飾るのがバリのホテルの慣例である。



写真4-6 ギャラリー



写真4-7 椰子と田園の風景

ウブドは、もともと田園の中ののどかな風景と芸能芸術を売り物にする観光地であった。いままウブドとその周辺には、絵画などのアートを売るおおくのギャラリーが立ち並ぶ。ただし、主要道路沿いに店舗や宿泊施設が林立するようになったため、そうした田園風景を眺望できる宿泊施設はもはやウブド中心部にはほとんどない。写真4-7は、本章扉の写真にあるミニギャラリー付近からの眺望である。

に比肩するビッグビジネスが生まれる見通しは、現状まだないようである。

このように、ウブドの土地所有者は概して堅実なビジネスマインドを一貫して保持しており、とくに中心部では小中規模の店舗経営者を相手に利ぎやを稼ぐというスタイルがなお主流である。背景には、集落内の土地を自由に売買できない慣習法がある。こうして、結果的に、観光地ウブドは大型の外部資本による観光の支配から守られてきた。ただし、それゆえ、ウブドは、南部のコアエリアのような大口の団体客を滞在させ大量に消費させる観光地へと変貌することができず、個人旅行者中心・現地資本中心の中規模観光地にとどまっている。海岸部の主要観光地に宿泊するバックツアー客は、日帰りウブドに来る程度であり、ウブドでの消費に貢献する余地はかぎられる。ただし、中規模観光地であるがゆえに、得られた利益がある程度は現地の経済システムの中に還流するという状況を保つことができている。

この収益をもっとも効率的に得てきたのは、いうまでもなく土地所有者である。彼らが強気に土地契約料を上げてきたため、土地所有者やその家族・親族が半ば道楽で経営するような一部の店舗をのぞけば、賃貸で成り立つ各店舗は相当な収益をコンスタントに上げなければならない。加えて物価の上昇もある。ただ、ウブドの場合、その店舗の経営規模は総じてちいさなものである。それゆえ、ここに一定の資本をもった在米の、国内外の個人事業者が入り込む余地がある。とくに、外国人事業者の大半は、もとは観光者としてウブドを訪れ、その居心地のよさ——海岸部のような大規模開発や喧噪がなく、落ち着いた雰囲気を残してきた——ゆえに、そこに生活の拠点をもつた人々である。ホスト化した元ゲストである彼らは、海外から来る観光者つまり購買者のニーズやトレンドを、バリ人よりもよく知る立場にある。この文化資本と、手落ちの外貨や貯蓄という経済資本、そしてバリ人／インドネシア人のパートナーという社会関係資本——このパートナーによって観光ビジネスに引き込まれることがおおい——を組み合わせ、現地の比較的安価な労働力および生産・流通システムを最大限活用するブリコロールとなれば、観光ビジネスに勝機を見出すことは可能である。店舗の立地や業種にもよるが、2000年代はじめまでなら100万円ほど、場合によっては数十万円ほどの原資でも、ビジネスをはじめめることは可能であった。中には、ウブド中心部にある1坪ほどのちいさな雑貨店を年3万円、5年分一括支払いで契約し、改装に7万円ほどをかけて開業した日本人もいた。これは例外的に廉価なケースといえる——長期滞在後に開業に踏み切ったため、流暢なインドネシア語と蓄積した知識や人間関係を有効活用した結果と考えられる——が、こうした小規模な外国人起業家のビジネス参入は、ウブド外・バリ島外のインドネシア人資本家・起業家の参入とも相まって、ウブドの観光市場のさらなる活性化を促進するとともに、小中規模の経営中心という構造を固定化することにもなった。ただし、そうした外国人起業家がつねに優位な立場にあるわけではない。むしろ、彼らは、土地・建物の所有者との関係では、後者から搾取される——またビザなどの仲介業者にも多額の費用を支払わざるをえない——弱い立場の間人であることもままある。

以上をまとめよう。バリ島内陸部にあるウブドは、芸術を売り物とする観光地であったが、1990年代以降は、田園や森林の風景の中のリラクゼーションやエコツアーなどの体験観光の需要を満たす観光地という性格も強めてきた。その中心部は、いまま大型の外部資本が入りにくく、小中規模の店舗がひしめき合うという構造をもっている。右肩上がりが高騰する土地契約料は、ウブドの店舗に淘汰を促している。事実、数年を待たずに閉店したり移転したりする店舗は数おおい。そして、コマ切れに近い土地を高い賃貸料で貸すという中心部の構造が、観光地ウブドを中規模レベルの市場にとどめおくとともに、観光ビジネスに必要な諸資本をもつ外国人起業家の小規模ビジネスが浸透する素地をなしてきた。

(3) バリ観光におけるリスクの顕在化

次に、ウブドを含むバリの1990年代以降の観光状況について、リスクの顕在化という観点から振り返っておくことにする。詳細は拙論を参照する（吉田 2009, 2020a, 2021c）。

30年以上つづいた「開発独裁」体制下のバリで、持続的な経済成長を背景にした資本投下と観光開発が継続的に進んだことは先述した。そこに、冷水を浴びせる出来事が起きた。1997年のインドネシア通貨危機である。通貨ルピアの1/5近い急落と3倍近い物価の上昇が人々とくに給与所得者の生活を直撃し、ジャカルタでの暴動が映像となって世界に流れたことで、外国人観光者はバリやインドネシアへの訪問を一時的に控えた。しかし、バリではほとんど騒ぎがなく、その後の民主化へと向かう流れとルピア安の魅力もあって、バリ観光はすぐに回復した。また、暴動の矛先となったジャカルタの華人系インドネシア人が比較的安全なバリに目を向けたことにより、彼らのバリへの投機傾向はむしろ加速した。さらに、ルピア安は観光に次ぐバリ経済の柱であった織物産業の淘汰をもたらし、結果的にバリ社会は観光依存体質をいっそう強めることとなった。バリ島の西隣のジャワ島中東部はバリに滞在する観光者が消費する食材やみやげ物の供給地となり、東隣のロンボック島を含め、バリ島周辺地域からバリに職をもとめて入域する非バリ系インドネシア人もさらに増加した。20世紀末の時点で、観光産業の従事者はバリ人の4割、運送やみやげ物産業など間接的な従事者も含めれば7割、また観光がバリ人の総収入に占める割合は5～6割、バリの域内GDPに占める割合は3分の2となり、21世紀はじめのバリ人家族の8割が観光から収入を得ていたとされる。タープリーが指摘したように、バリ人が経済における急速な観光セクターの拡大と他セクターとくに農業の縮小にたいするリスク認識を欠いていたわけではない。ただ、もはやバリ経済の観光依存体質は後戻りできないところに来ていた。そこに、2001年9月のアメリカ同時多発テロ後の世界的な観光不振と、2002年10月のクタでの爆弾テロ事件後のバリ観光の不振が到来した（Couteau 2015; Harvey 2007(2005): 136-139, 241; Hitchcock & Putra 2007: 171; Howe 2014; Interim Consultative Group on Indonesia 2002; 永野 2007; 中谷 2009, 2016a, 2016b; Picard 2009: 102; Ramstedt 2009: 333-335; Schulte Nordholt 2007: 8; Tarplee 2008: 158）。

200人をこえる死者と数百人の傷者を出した2002年のテロ事件は、観光依存度を深めていたバリ経済を直撃した。テロの直後、いったんバリの観光地から外国人観光者はほとんど姿を消した。半年から1年のタイムスパンでみれば観光者数は半減程度であったが、バリ人の実感としては「7割減」「9割減」という印象であった。観光関連の諸企業や店舗は軒並み厳しい経営を迫られ、倒産や閉店に追い込まれるところもおおく出た。解雇や賃金カットが続出し、閉店時間が早まるなど、業務縮小はつづいた。ヌサドゥア、サヌール、クタといった南部の観光地では、テロ後半年をこえるあたりからパックスツアー客が戻りはじめたが、周辺部の観光地であるウブド、チャンディダサ、ロヴィナの観光回復はさらに遅れ、皮肉にも、爆弾テロ事件のあったクタ以上に深刻な状況がつづいた。さらに、これに追い打ちをかけるように、2003年のイラク戦争とSARS（重症急性呼吸器症候群）、2004年の鳥インフルエンザとインド洋大津波、2005年の2度目のクタ方面での連続爆弾テロ事件、2006年の中部ジャワ大地震、2007年のガルーダ国内便の墜落事故などが連なった。1997年のインドネシア通貨危機以降の約10年間、バリ観光は、回復してはダメージを受ける、客が回復してはまた減る、という事態を繰り返した（Byczek 2010: 57; Hitchcock & Putra 2007: 145-149, 160-161, 2010; Interim Consultative Group on Indonesia 2002; Lewis & Lewis 2009: 205-209; MacRae 2015: 75; Putra & Hitchcock 2009; Ramstedt 2009: 334-335; Tarplee 2008; Warren 2007: 196）。

この不安定な10年は、1990年代の観光発展期に右肩上がりの将来を予期して移住や起業をしたバリ在住日本人に、経済的にも精神的にも相当な打撃を与えた。この種の事件に敏感な日本人観光

者が激減したことで、日本人観光者を主要な顧客に想定していた店やビジネスをたたんだり、バリでの生活をあきらめて帰国したりと、人生設計の再考にいたる日本人経営者もいた（吉田 2004, 2013b）。その後、バリ観光は回復基調に向かった。ただし、日本人観光者数はあまり伸長せず、2010年代半ば以降に微増する程度にとどまった⁶。とくに、ウブドでは、2010年代に入って欧米系や中国・台湾系そしてインド系の観光者が続伸する一方、日本人観光者をあまり見かけなくなった。ウブドに在住し観光業に携わるバリ人・日本人の認識も、日本人観光者は1990年代にはおおかったが、2010年代には目に見えて減っている、というものである。バリの特定観光地を訪れる観光者数を示す公式のデータは存在しないが、日本人観光者がウブドに来なくなった、そもそもあまりバリに来なくなったという傾向は、定着したと考えられる。2010年代のバリそしてウブドの活況は、欧米系および中国・台湾系の外国人観光者と国内観光者によって支えられていた。日本人観光者を主要な顧客に想定した観光ビジネスは、今後ウブドでは立ち行かなくなると考えざるをえない。そして、2020年には、新型コロナウイルス感染症拡大による「観光恐慌」が到来した（吉田 2021a, 2021c）。爆弾テロ事件の際よりも長くまた深刻な観光者不在の状況がバリの経済や人々の生活に与えた打撃は、大衆観光時代以降未曾有のものであった。

以上をまとめよう。2002年のテロ事件は、バリ人に観光の危機やリスクを強く意識させた。その危機感は、2010年代に入っていったん収束したが、2020年からはコロナ禍による観光者不在状況が2年にわたりつづいた（序言）。さらに、楽園観光地バリが抱える根本的な問題もある。現状のバリは、同質のシミュラークルに満ちた世界各地に点在する他の楽園観光地との競合関係に勝つ決め手を持ちあわせておらず（序章第2節）、その楽園イメージを掘り崩していくかのような乱開発と環境破壊も進行している。端的に言って、バリの社会と観光のリスクはさらに高まっており、



写真4-8 閉鎖し荒れた状態の店舗跡



写真4-9 観光者で賑わう飲食店

2023年3月現在、ウブドのみならずバリの主要観光地では、国内外から来る観光者により賑わいが戻りつつある一方、借り手がまだ見つからない店舗や店舗跡もところどころ見受けられ、観光が回復途上であることがうかがわれる。

6 バリ州中央統計局のデータによれば、バリに直接入域する日本国籍者数は2014年から微増し、2019年には減少に転じた（<https://bali.bps.go.id/statictable/2018/02/09/27/jumlah-wisatawan-mancanegara-yang-datang-langsung-ke-bali-menurut-kebangsaan-2013-2016.html>）。また、ウブド在住の鳥居は、2020年7月時点で、バリに来訪する日本人観光者が2010年以降減少傾向にあるとし、その理由を次のように整理した。①日本の経済状況を背景に、日本人の平均旅行日数が4泊6日～5泊7日から2泊4日～3泊5日程度へと減少した。②それゆえ、日本からの移動時間が短く、複数の航空会社の直行便がある台湾、タイ、ベトナムなどが選好されるようになった。③バリは、これらに比べて移動距離が長く、日本からバリへの直行便がガルーダだけになり航空運賃も値上がりしたことなどにより、敬遠されるようになった（<https://www.umaubali.net/post/japanese-traveler>）。鳥居のこうした分析は妥当なものであろう。他の東南アジア諸国よりもインドネシア行きチケットの燃料サーチャージは高額であり、その高騰がつづけば、日本人観光者のインドネシア離れはさらに固定化すると予想される。なお、バリ州の統計データと鳥居の指摘との間には、日本人観光者数の増減傾向に関して若干の差異があるが、これは根拠としたデータの違いに由来すると考えられる。ここでは、前者のデータを踏まえることにした。

バリ人もそれを大なり小なり認識している（吉田 2021c; cf. 岩原 2020; 永淵 1994; Putra 2011: 135）。

ウブドにおいて観光ビジネスを営む人々も、むしろそうしたバリ観光のリスクを強く感じている。バリ人所有の店舗であれ、日本人ら外国人所有の店舗であれ、2010年代に入って以降は、経営姿勢の緩い店舗ビジネスが撤退または縮小していき、規律や経営姿勢の明確な店舗が存続または伸長する状況が、さらに際立つようになった。コロナ禍は、この勝者と敗者との分岐やそれによる淘汰を加速させるものでもあった。

では、以上の概観を踏まえて、ウブドの日本人移住者の記述に入っていくことにしよう。

第3節 それぞれのホームのかたち

(1) ウブドの日本人ライフスタイル移住者

前節では、1990年代にバリの観光開発が全島的な広がりをもつようになったこと、その中でウブド周辺地域の観光開発も進み、自然体験型観光・エコツーリズムの拠点的性格も強まったことに触れた。この1990年代は、バリに雇用の機会をもとめる非バリ系インドネシア人移住者の増加と、バリに居場所をもとめる外国人ライフスタイル移住者の増加とが重なる時期でもあった。インドネシア政府がリタイアメントビザを導入した1999年以降、後者の移住者はさらに増加した。その移住者全体の中には、相当数の日本人もいた（序章第5節）。円高、ルピア安、日本人の海外旅行の定着、日本におけるアジア人気、メディアを通じた「楽園バリ」のイメージの流通、バブル崩壊後の自分探しの旅の流行、日本の社会・経済の先行き不透明感などの複合的な契機が相まって、日本人をバリへといざなうと考えられる。

とくに、ウブドは、青い海やサンゴ礁といった楽園観光地を彩る定番の要素はないものの、観光客がイメージする楽園らしさやバリらしさ——椰子の木、田園風景、芸術、宗教文化、素朴な人々——を保持するとみなされた観光地であり、日本における合理化されているがストレスの溜まる生活を中断または放棄し、自身が見出した地上の楽園でのんびり暮らすことを選択した一定数の人々が、ここに集まるようになった。そして、彼らの一部は観光客を相手にしたビジネスをはじめた。ただし、それは、営利追求を目的としたものというよりも、必要十分な生活の糧を効率的に得るための手段という性格が濃厚なものであった。もちろん営利追求に意欲的な人々もいたが、彼ら90年代にウブドでの暮らしを選び取った人々のおおくは、あくなき利益の追求には否定的・懐疑的であり、儲けはほどほどでよい、場合によっては儲けなくてもよい、という考え方をもっていた。

拙論では、これを「反ビジネス的志向」の生き方と呼んだ（吉田 2005b, 2013b: 272-274）。彼らのビジネスは、総じてこの反ビジネス的志向とセットになっていた。あるいは、経済的な生産性とはかならずしも折り合わない、価値実現という精神的な意味での生産性こそ、彼らの生とビジネスの根底にあるものであった。2000年代に入ると先述のリタイアメントビザ制度が年配者の移住を後押しし、2013年の東日本大震災後には（東北ではなく）首都圏の比較的富裕な人々がバリそしてウブドにも逃れてきた。序章でも触れたように、コロナ禍前の2019年時点で、ウブドとその周辺には数百人をこえる日本人移住者がいたと推定される。その中には、十分な資金や年金をもとに悠々自適の生活を送る年配者の夫婦やシングルもいたが、生活資金の一部または全体をバリでの収入に依存する者もあり、コロナ禍で苦況に陥り、帰国する者もいた（今野 2016: 84; MacRae 2015: 76; 吉田 2013b: 30, 220a; 吉原 2016c; 吉原・松本 2016）。

私は、拙論で、2000年代を中心としたウブドの日本人観光ビジネスの特徴について論じた（吉田 2005b, 2013b: 231-277）。その議論のポイントは3つあった。第1は、いま述べたように、ウブ

ドにおける一定数の日本人のビジネスが、営利追求を二義的とみなす彼らの反ビジネス的志向の生き方と不即不離であったという点である。第2は、こうした彼らのビジネスが、小中規模のビジネスの集積体である観光地ウブドの経済市場の構造と対応し、この構造に支えられていた——また、観光地ウブドも外国人の小規模起業家に相当程度依存するようになっていた——という点である。それもすでに触れた。そして第3は、こうした観光地ウブドの構造と、営利追求に否定的・懐疑的な彼らの生き方との共振関係は、いわば危うい均衡の上に成り立つものであって、近い将来において変質していかざるをえない可能性が高い、という点であった。換言すれば、観光地ウブドの特性も、ここに居場所を見出した日本人移住者のビジネスとそのライフスタイルも、高いリスクや不確実性を抱えているということである。以下では、この第3点について確認することを主眼としつつ、一部は拙論の記述を圧縮し、また一部は民族誌的事実を補足しながら、約30年にわたる断続的な参与観察とインタビューデータを整理し、数人に絞ってウブドの日本人の暮らしぶりの一端を記述していくことにしたい。なお、以下に登場する日本人のアルファベット名は、拙論（吉田2005b, 2013b, 2019b, 2021c）における記述と対応させている。

(2) A氏

A氏（1938–2021、男性）は、観光地ウブドにおける最初の日本人店舗所有者かつ日本人ライフスタイル移住者である。生涯独身であったA氏は、自らを『暮らしの手帳』の愛読者だった」というように、身の回りのことは自身でこなし、比較的質素な生活をバリで送っていた。そして、コロナ禍中の2021年5月に鬼籍に入った。享年83歳であった。懇意にしていた集落の人々により、簡素な火葬が執り行われた（この時期、コロナウイルス感染死亡者については、ヒンドゥー式の火葬を催行して弔うことはできなかった）。

A氏の最初のバリ来訪は1978年であった。そのきっかけは、1970年のヨーロッパ旅行の帰りにナホトカから乗った船でドイツ人と知り合ったことであった。彼を自宅に泊めたことが縁となり、その数年後、A氏はミュンヘンにあるこのドイツ人の家に遊びにいった。そのとき、壁にかかった仮面をみせてもらい、音楽を聴かされた。A氏が彼に尋ねると、お前は日本人なのに知らないのか、といわれたという。それがバリの仮面であり、ガムラン音楽であった。A氏は「私はドイツを通してバリを知った」と述べる。

この1978年のバリ旅行の際、A氏は当初クタヤデンパサールに滞在したが、「そのときには最後の楽園バリという印象はなかった」。しかし、ガイドの勧めもあってその出身地ウブドに来たときに、「ここに私の思うバリ、楽園バリがある」と実感したという。そのころウブドにはアスファルトの道路もレストランもなかった。4軒ある宿はいずれも3食付きであった。本格的な観光地化の前段階であったウブドを気に入ったA氏は、その後もたびたびこの地を訪れ、1982年にこのガイドの住む集落に家を建てた。当時のA氏は日本を生活の拠点としていたので、A氏が不在のときは人に貸そうということになり、これをホテルとして届け出て、A氏は中期滞在のための就労ビザを取得した。

A氏は、1990年ころから1年の半分をウブドで暮らすようになった。ここから30年余の悠々自適のバリ暮らしが本格化した。この年、別のホテルをウブド郊外に建てて移り住んだ。その建設費用は自身の宿泊費の代わりとみなし、新旧いずれのホテルも滞在期間の終了後にそれぞれ別のバリ人に譲渡した。また、A氏は、自身の恩師に当たる大村しげをバリに迎え、最期を看取った。バリを愛した大村の葬儀は、遺言にしたがいバリのヒンドゥー式に執り行った。京都生まれのこの恩師が「大文字が見たい」といい遺して逝ったので、毎年8月下旬に、竹を大の字に組んで燃やす「大

文字焼き」を催行し、恩師を偲んだ（吉田 2021c: 175-179）。

A氏は、2014年にウブド郊外に建てた新居に移り、その2階をアートスペースとし、ここに30年以上にわたって開催してきたウブド郡の子どもの「絵画コンテスト」(Lomba Melukis)の作品の一部を展示した。おなじく約30年間つづけ、2010年代前半に終了した「凧揚げコンテスト」(Lomba Layan-layan)とあわせ、A氏はこれら2つの子ども向けイベントを、ウブド郡の教育委員会関係者の協力を得て毎年自費で運営してきた。こうした地域社会への貢献もあって、A氏はウブド王宮からバリ人名を贈られていた。A氏の火葬の際にも、ウブド王宮からおおきな献花が贈られた。

以上をまとめよう。A氏はウブドで起業した最初の日本人長期滞在者であった。ただ、A氏のホテル運営の実態は、利潤の獲得を目的としたビジネスとはいえないものであった。経済的に余裕のあるA氏にとって、ホテルの建設は、生活の糧を稼ぐための手段ではなく、居場所の獲得、そしてそれに尽力してくれるバリ人の収入確保のための手段であった。ともあれ、A氏は、前節で触れたようなバリそしてウブドの観光の浮き沈みにほとんど影響されることなく、30年以上一貫して「楽園」と感じたウブドをホームとする安定した生活をつづけ、恩師とおなじくバリで茶毘に付されたのであった。

(3) B氏

次に、1991年に日本食レストランを開業させたB氏（2022年末現在59才、既婚、女性）について記述する。このレストランは、C氏（2022年末現在75才、独身、男性）との共同経営でスタートした。なお、ウブドで1990年代初頭までに開業したいわば第1世代の日本人店舗の中で、現在までずっとつづいているのはこのレストランのみであり、他は閉店したりバリ人所有の店舗となったりした⁷。

B氏は、OLであった1987年に短期の旅行ではじめてバリを訪れた。その後再度バリを訪れ、バリとくにウブドの文化や自然の全体に魅かれた。1990年には日本での仕事をやめ、ウブドに半年間滞在するつもりでバリに来た。当時、バックパッカーに相当する旅行者や中長期滞在者は、ウブドの公設市場にある現地人向けの屋台で食事をする傾向があった。B氏とC氏はここで知り合った。C氏は、B氏の料理の腕前を見込んで、それまでウブドになかった日本食レストランの共同経営を提案した。こうして、B氏とC氏は店舗開業の準備に踏み切り、就労ビザを取得して長期の滞在をはじめた。

白壁と黒く高い屋根、開放感のある客席からなる彼らのレストランは、当時のウブドにある店舗の中でも出色のデザインの建物であった。B氏が提供する家庭的な日本食と、C氏のよろず相談役を兼ねた接客とが有機的に機能し、このレストランは、1990年代後半になって日本人経営のレストランが複数できて客が分散するまで、日本人の中長期滞在者や個人旅行者のたまり場として機能した。また、日本人以外の外国人観光者や日本びいきのバリ人芸術家にも一定の人気を博した。旅行会社からは、日本人ツアー団体客の昼食場所にしたいという申し出が何度かあったが、ふたりはこれを断っていた。「儲かるだろうが、店の雰囲気が悪くなるから」(C氏)というのである。両者とも、ウブドとその周辺の文化や宗教に深い関心と共感をもち、ウブドに来る個人旅行者にバリに関するあれこれの情報を伝え、ときには儀礼や寺院祭礼があると車やバイクで案内もした。

このレストランは、最初の土地契約から10年後の契約更新——当時は10年契約が普通であった。

⁷ ただし、1986年に開店した日本人店舗第2号のレストランは（吉田 2013b: 241）、いったん閉店後、場所をより郊外に移し、2020年にプチワルン（食堂／カフェ）として再開している。

その後、外国人との賃貸借契約の年数は5年程度に短縮され、2010年代半ばからは1～2年が主流となった——を控えていた1998年に、バリ人男性と結婚（インドネシア国籍を取得）していたB氏が単独で所有することになり、共同経営者であったC氏は撤退した。それまで利益は折半していたが、諸物価の高騰と従業員の給料のスライド上昇もあって、純益の伸びが鈍くなったこと、C氏が単独ではじめた別のビジネス（後述）が軌道に乗りつつあったことが、その背景にあった。店舗の土地契約は5年の延長となった。その後、2002年10月のバリ島クタでの爆弾テロ事件によって、このレストランの売り上げはおおきく落ち込んだ。年末年始の繁忙期に観光者がほとんど来ず、開店休業状態で赤字がつづき、C氏の助言もあって、B氏は従業員の解雇や減給に踏み切り、半年以上つづいたこの厳しい時期をしのいだ。

2004年、B氏はふたたび土地契約更新の交渉に入った。しかし、地主側と折り合わず、B氏は、道路からより奥に入った隣接する別の土地の契約を別の地主と結んで、新たな建物を建ててレストランをつづけた。B氏は、この新規開店に前後してもうひとつのビジネスをはじめた。バリ料理を教えるショートレッスンである。バリの食材に関心のあったB氏は、夫の家族と生活する中でバリ語やバリの生活習慣に習熟し、すでに若いバリ人女性がつくらなくなった調味料を自らつくるなど、さらに料理の知識と技能に磨きをかけていた。この新規のビジネスは、そうした経験の蓄積を生かしたものであった。リピーターとなる客はおおくないので、このサイドビジネスの収入は安定したものではない。しかし、B氏の友人によれば、当時のB氏にとってこの新たな取り組みは、新鮮味がなくなったレストラン経営に代わる生きがいとなった。B氏は、どんぶり屋など新規の小規模店舗を企画したこともある。また、日本人を顧客とした結婚式の仕事に南部の観光地等で関与したこともある。その後、土地の契約更新が折り合わず、B氏は2013年に、より郊外の集落に再度レストランを移転させた。そこでも、このショートレッスンはつづけている。

この2度目の移転に際しては、B氏の心中に相当な逡巡があった。20年以上つづくこのレストランを閉めて、夫や子らと暮らすウブドから10キロメートルほど離れた村で、弁当屋をはじめすることも検討した。この村は、州都デンパサールに近く、主要な観光地を結ぶ街道沿いにある。現地人が買って食べる通常の弁当より割高ではあっても、地元の素材をつかった日本食的なおかずを入れた新しいタイプの弁当を売れば、比較的裕福な現地の人々に加え日本人観光者にも売れるのではないかと考えたのである。しかし、B氏のイメージにかなう適切な店舗場所を見つけれず、結果的にこの弁当屋の企画は見送り、ウブドにあるレストランを土地契約料の安価な場所に移転させ継続することにしたのである。

そのころ、バリ暦の正月に当たるガルンガン（Galungan）がめぐってきた。B氏は、この節目の日を前に、スタッフ全員を集めたミーティングを行った。B氏によれば、スタッフは閉店の可能性を相当心配していた。しかし、移転し店をつづけることにしたと述べると、みなが安心したようだったという。このミーティングの際、あるスタッフが代表して次のように述べた。このレストランのおかげで、われわれ従業員と、その妻や夫——ひとりを除いてみな既婚者である——、子どもたち、合わせると60人以上があなたとこの店のお世話になっている、と。B氏は「このときあらためて自分の責任を自覚した」と述べる。B氏は、レストラン経営に若干意欲を失っていた時期、「5年ぶりに来ました、10年ぶりに来ました、といった客の声に励まされて」店をつづける気持ちを新たにしていた。この2013年のガルンガンの際は、長年働いてきたスタッフ——半数近くが勤続20年以上である——の声に励まされて、「60歳あたりまでは店をつづけようという思いを新たにしました」という。

2度の移転の際にはいずれも、レストランは閉店したという噂が立ち、開店直後の客足はかなら

ずしも順調ではなかった。とくに2度目は郊外の村への移転であったため、客足が戻ってきてくれるか、B氏や友人たちはかなり心配していた。しかし、日本人リピーター客の絶大な支持と、折からの日本食ブーム——2013年に和食がユネスコ無形文化遺産に登録された——の中での外国人観光者の需要増、さらには所得の増えたバリ人・インドネシア人リピーター客の増加などにより、コロナ禍においても比較的安定した経営状況を保つことができた。ただし、他方では、土地契約を渉る地主との折衝、諸物価高騰による利潤の低減、テロ事件、コロナ禍での政府指示による休業といった困難にも直面してきた。

B氏の夫は舞踏家であり、一族の本家筋の長男である。父系社会のバリでは、社会組織や宗教における長男の役割は重い (cf. Geertz 1959; Geertz & Geertz 1989(1975); Howe 2001)。夫は、父の後を継ぎ、村における重要な儀礼舞踊の踊り手をつとめる。また、ガムラン音楽・舞踊のチームの一員として海外公演にもしばしば出かけてきた。B氏がこのチームを応援していた縁から、ふたりは結ばれた。

B氏は、夫の家族とともに住む住居と店舗とを毎日車で30分ほどかけて通う。近年は夕方に店に入り、夜の営業時間中ずっと厨房で調理作業をする。接客は、短時間のあいさつ程度である。従業員を帰らせた閉店後も仕込みをし、帰宅の途につくのは通常夜中12時過ぎ、1時や2時となることもある。結婚当初は、夫の家族・親族への手前もあって、早朝に起きて朝食をつくり、100個ほどの供物(チャナン)をつくって供える仕事を毎日し、店にも早めに入っていた。睡眠不足は、しばし午睡を取ることで補った。しかし、これでは生活のリズムや体調を整えることは難しい。途中からは、供物の準備と献納は夫の母に任せたが、それでも大家族ゆえの気苦労や本家筋ゆえの仕事などはあった。たとえば、ガルンガンの日は早朝3時ころから男性たちが共同で豚を屠るが、その際男性にコーヒーを出すのは女性の仕事とされており、長男の嫁であるB氏がこれをつとめることもあった。ガルンガンは賑やかな正月であり、家族・親族が集まるため、B氏は家で休めない。そこで、B氏は、従業員のために休業にした静かなガルンガンに店に来てゆっくり休むようになった。ガルンガンの日は、普段忙しい店舗がくつろぎのホームになったのである。

B氏は、かねがね屋敷地の中に自分たち親子だけが住む別棟を建てる夢をもっていた。B氏にとっては、夫の大家族とともに暮らす屋敷——複数の寝室棟、共有の台所とトイレ兼水浴場からなる開放的な空間である——ではなく、そこから囲い込まれた夫婦と子どもだけの空間こそが、希求されるホームであった。この念願の別棟は2010年に完成した。キッチン、ダイニング、リビングに加え、トイレと、バリ人住宅には通常ないバスタブもつけた。風呂・キッチン・冷蔵庫を独立させることが、B氏にとっては重要であった。

以上のように、B氏は、中期のバリ旅行の途中で、バリに滞在し日本食レストランをはじめ断を断し、そのままバリでの生活に入ってしまった。レストラン経営がつねに順調であったわけではない。観光者の増減の波、テロ事件やコロナ禍による休業状態、土地契約の更新断念による店舗移転など、不安定な時期は何度もあった。また、高騰する土地契約料・食材費⁸・光熱費は、利潤を縮小させる方向に一貫して作用してきた。そうした中でも、B氏は、他店に比べれば高い給与を従業員に支払い、昇給も行ってきた。B氏が店舗の閉鎖を検討したり、ビジネスにたいする意欲をやや希

8 たとえば、2010年代前半、日本での小売価格が1500円ほどのパック焼酎は、バリの食材店では6000円程度で売られていた。高率の関税によるところがおおきいが、物価高騰とともに中間マージンが上がったためでもある。小規模経営の日本食店舗はこうした日本食材店から仕入れることになるが、これを店での販売価格にそのまま転嫁はできない。焼酎以外にも「売れても儲からない」ものはある。

薄化させたりしたこともあったが、変わらぬ味と店の雰囲気を慕う顧客の声を繰り返し聴き、従業員とその家族への責任を自覚する中で、B氏は結果的に30年以上にわたりレストランをつづけることとなった。B氏のレストラン経営は、利潤の追求という経済的観点ばかりでなく、こうした過程の全体に照らして理解されるべきものである。

また、B氏のレストランが日本人のリピーター観光者や中長期滞在者にとってひとつのホームとして機能してきた、という点も指摘できる。B氏にとっても、この店舗は、念願であった別棟というソリッド・ホームを得るまでは、大家族で暮らす夫の実家というかならずしも安らがないホームの、ある種の代替として機能してきたといえる。

2017年に、B氏は15年ぶり2度目の日本への帰国を果たした。ただ、実家に泊まったのは2泊程度であり、主たる目的は、親との久しぶりの再会よりも、まだ日本に行ったことのない第2子に日本を紹介し、温泉などに行ってしばらくゆっくりすることであった。つまり、この約1週間の日本旅行は、束の間の休息を過ごす海外観光であった。ただ、到着前に機中から地上の風景を見ているときには、日本が自分の祖国であるという感慨を覚え、涙が出そうになったという。また、温泉旅行ではあらためて日本の社会や自然のよさを実感し、近いうちにまた日本を訪れたいという思いを強くした。B氏の周囲には、日本に観光に行きリピーターになるバリ人が何人かいるが、自分もそれに近いのかもしれない、とB氏はいう。大家族とともにバリ人的生活環境の中で暮らすB氏にとって、この日本旅行は、それまで背後に退いていた日本というもうひとつのホームへの思いを喚起する機会となったようである。

(4) C氏

次にC氏について述べる。店舗デザイナーであったC氏は、日本での生活をいったん切斷し、外国で生活することを決意して1990年に日本をあとにした。当初はバリの東隣のロンボック方面に向かうことを考えていたが、そこに行く手前のバリで、ウブドに滞在するうちに、ウブドで暮らすことを考えるようになった。日本に戻る退路を断っていたC氏は、いずれバリで生活資金を得る術を探さねばならなかった。それは、先述したように、B氏と協同の日本食レストランというかたちをとった。このころ増えはじめた日本人のリピーター観光者と中長期滞在者がおもな固定客となり、このビジネスは軌道に乗った。

C氏は、1994年から5年間、このレストランの常連客でもあった、短期でウブドにやってくる日本在住のリピーター観光者向けに、年6回発行のウブド情報誌を友人の協力を得て発行し、バリから定期的に送るという試みもした。さらに、C氏は、このレストランの開業・経営を通して蓄積した各種の情報やバリ人との人間関係を資本に、1995年に単独で旅行会社をウブドに開いた。この会社は、顧客のほとんどが日本人であることを特徴とする。たとえば、この会社のウェブサイトも、英語版やインドネシア語版はなく日本語版のみである。一時期はこの旅行会社の2号店もあったが、これは2年ほどで閉めた。また、C氏は、1998年に自然な素材感を生かした雑貨やインテリアの販売スペースに簡単なカフェを併設した店舗も開いた。その商品の一部はC氏のオリジナル造形品であり、この店舗はC氏の道楽の要素も漂うものであった。このように、1990年代のC氏は、温めたアイデアを実行に移しビジネスのサイクルがまわっていくという好循環の中であった。ただし、生活は質素とあってよく、昼ごろ起床し、日暮れまでは創作活動に取り組み、夜はレストランで接客をし——日本食レストランの所有者を辞めたあとも、C氏は食事がてら接客役をつとめることがおこった——、ときに買い付けや各地の儀礼・祭礼・舞踊の見学に行く、というのが当時のC氏の生活パターンであった。2004年には、雑貨店の2号店（こちらは雑貨販売のみ）

を開いたが、この店舗は2年を待たずに閉店した。1号店は、2004年以降大口業者との取引がなくなったことから2006年に閉店し、店舗の賃貸権を友人のインドネシア人に返した⁹。こうして、C氏のビジネスは旅行会社1店舗のみとなった。

この旅行会社は、空港送迎やデイリーツアーなどをおもな商品とし、小規模ながら堅実な観光ビジネスを営んできた。特徴的なのは、大手のツアーオフィスが手掛けることのない、ある地域に固有の宗教文化（音楽、田園風景、寺院祭礼、トランス儀礼、占いなど）をテーマにした不定期ツアーを商品化した点である。バリの諸地域の宗教・文化・芸能に関心を寄せてきたC氏ならではの商品戦略ではあるが、こうしたニッチビジネスは、かならずしもおおきな需要があるわけではなく、また需要があれば別会社が参入してくるため、なかなか有力商品として発展させにくい。2000年のインタビューで、C氏は次のように語った。「[ある地域の] トランスも、10年つづけて見ると、おなじ人がおなじトランスをつねにやっているとわかる。たとえば、この人の場合は、木になるトランスであるとか。でも、木になるトランスは、じっとしているだけでツアーリスト受けしないため、ツアーとしては企画しにくい。ジュゴグ [大きな竹のガムラン] のツアーは、複数のツアーコンダクターがやるようになったので、うちがはじめたのだが、もう手を引いた」。

この2000年ころは、ウブドに来る日本人観光者数が右肩上がり増加していた時期であり、店舗の営業も順調であった。C氏は、業務はバリ人スタッフに任せ、もっぱら企画・ウェブサイト運営・収支や業務の簡単なチェックに携わり、「何もしなくてもお金が入ってくる感じであった」という。しかし、2002年のバリ島クタでのテロ事件の直後は月1万円程度にまで収入が落ち、その後のバリ観光は浮き沈みの不安定な状況に入ってしまった。この旅行会社は、固定客を抱えていたものの、新規の顧客を開拓しビジネスの裾野を広げていくという経営方針は希薄であった。その背景には、C氏があくなきビジネスの追求に否定的であり、バリで何とか食べていければよいという考え方をもっていたこともあったと考えられる¹⁰（吉田 2005b, 2013b）。結果的に、当初4人のスタッフを抱えていたこの旅行会社は、個人的な都合などによって辞めていったスタッフの補充をしないまま、2012年には1名だけが残る体制となった。

C氏は、2000年のインタビューの際、「本当はこっちで火葬にしてほしい」と心境を吐露していた。当初、C氏はウブド近郊の集落に住むバリ人男性を身元保証人兼ビジネスパートナーとしていた。B氏とはじめたレストランの最初の名義人も彼であり、家族ぐるみの付き合いであった。C氏は、その集落や村の祭礼・儀礼の際にしばしば寄付をし、地域の人々に受け入れてもらうよう努めていた。それは、C氏がこの集落で茶毘に付してもらうことを望んでいたからでもある。しかし、諸般の事情からウブドの中心部や周辺の別の集落の間で居住地を転々としたC氏と、その集落の人々との関係は、やや疎遠になっていった。2000年当時、C氏は、この状況では、身元保証人やその集落が自分の火葬を受け入れてくれないのでは、と感じていたのである。「このあとまた、あの集落に移ってずっと住めば、あるいは火葬をやってくれるかもしれないが」と述べた、当時のC氏の語り口には、若干の諦念が混じっていたと私は感じていた。

⁹ 拙論では、店舗の賃貸権を友人のインドネシア人に「譲った」としたが（吉田 2013b: 244, 2019b: 87）、B氏はその友人から賃貸権を借り受けて開業していたので、「返した」と訂正する。

¹⁰ たとえば、この旅行会社のウェブサイトでは、エステやスパの良心的な店舗を紹介している。C氏によると、高い料金を取るスパの場合、その半分程度は中間マージンであり、これは客に紹介し案内するツアー会社やガイドの儲けとなる。しかし、C氏の会社はそうしたマージンを取らず、ただ紹介しているだけである。C氏は、だからこそウェブサイトを見た客がこの旅行会社を利用してくれると考えるのだが、スタッフの中には、ここで他店のように中間マージンを取って儲けるべきであって、C氏のつくるウェブサイトはその点で意味がない、という意見をもつ者もいた、という。

しかし、その後、次第に状況は変わっていった。身元保証人のバリ人との関係は、親密と疎遠の波を繰り返しながら、遠い関係になっていった。他方、C氏は、2013年からこの集落の別の知人の家に間借りすることになった。数年間借りていたアパートが値上げに踏み切ったことがきっかけであった。ただし、いよいよC氏が「終活」に入ったのかというと、かならずしもそうではなかった。引っ越しは経済的理由がおおきく、むしろこのころC氏は、バリを終の棲家とすることを再考するようになったのである。背景には、自身の旅行会社の業務縮小傾向、今後も予想されるさらなる物価の上昇、日本人観光者の減少傾向への危惧、などがあったと考えられる。きっかけは、中米のある国に在住の日本人がウブドに観光に来たときに、一度遊びに来てくださいと、C氏を誘ったことであった。C氏は、2014年に、24年間一度も帰っていなかった日本にいったん戻り、しばしばバリを訪れていた子や元妻らに会った後、中米のその国に渡って4カ月ほど滞在し、そこでの暮らしを試してみた。しかし、結果的に「やりたいことがみつからなかった」ということで、C氏はふたたびウブドに戻った。2019年からは、90年代からの知人が住むジャワのジョグジャカルタ郊外をしばしば訪れ、約1カ月ずつの滞在をするようになった。2020年4月ころにそこへ生活拠点を移す予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大を受けて引っ越しを保留し、2023年3月現在もウブド滞在をつづけている。

コロナ禍中、C氏は、経済的苦境に立たされた旧知のバリ人アーティストの芸術ビジネス（パフォーマンスのライブ配信、絵画ネット販売）をサポートするなど、バリで自分ができることに取り組んだ。その中で、当面はウブドで暮らしつつけるという選択肢の比重はやや高まったようにも見受けられる。ともあれ、現在のC氏は、日本に帰るといった選択肢も含めて、自身の安住のホームをなお検討中である。

以上をまとめよう。C氏は、1990年に日本を後にし、新たな居場所を見出すべく単身インドネシアにやってきた。当初予定していた目的地に向かう途中で訪れたバリのウブドが、C氏にとっては居心地のよいホームになった。1990年代のC氏は、ウブド周辺のバリ人そして中長期滞在日本人らとの間に親密な人間関係を構築するとともに、ウブドではじめての日本食レストラン、増加する日本人観光者をターゲットにした観光ニッチビジネスの開拓、自身の趣味にもつながる雑貨の販売など、アイデアを生かした観光関連ビジネスを次々と展開していった。しかし、2000年代にはウブドでの観光ビジネスがかならずしも右肩上がりではないことが明確になり、2010年代になると日本人観光者の伸びも頭打ちになった。C氏は、ここで、いったん終の棲家と考えていたバリを離れて新天地をもとめてみることにしたが、翌年にはふたたびウブドに戻るようになった。1990年代には安住の地にも見えた観光地ウブドは、2010年代以降かならずしも確固としたホームではなくなった。

ただ、その中でも、C氏がウブドに滞在する日本人のネットワークの中心につねにいたことに変わりはない。C氏は、意識して人と人をつなぐ結節点として振る舞いながら、短期の観光者から長期滞在者、あるいは芸術家や研究者まで、さまざまな人々に、恋愛・結婚からビジネスにいたるよろず相談役となって助言を与え、ときにバリ人・インドネシア人へと橋渡しをし、支えてきた。この点で、C氏自身が、日本人中長期滞在者やリピーター観光者らにとって、ホームたるポジションを占めてきたといつてよい。C氏をよく知るある日本人長期滞在者（2014年インタビュー当時、64歳、男性）は、C氏のオーガナイザーとしての力量を高く評価する。「C氏は、出会った若いさまざまなバリ人のもっている才能や性格を見極め、これをうまくつないで、イベントやビジネスにつなげていった。その一方で、ウブドの王族など、バリ人有力者をつかってビジネスをするという安易な方法を探らなかった。C氏は、バリ人といっしょに仕事をするすることで、バリ人を育て

た。C氏のやり方を横で見ている育ったバリ人がいると思う。ただ、彼の旅行会社にそれが引き継がれているとは思えない。彼の後継者といえる人もいない [のが残念である]。

(5) M氏

次はM氏（2022年末現在、52歳、既婚、女性）である。芸術系の大学でピアノを学んだM氏は、卒業を控えた1993年2月、「いまとは異なる環境のところに行ってみよう」と考えて周囲に相談した。ある教員が、ひとり旅でもバリ島のウブドであれば比較的安全であろう、知り合いの芸術一家がいるので、そこを訪ねるとよい、と助言し、紹介してくれた。

このはじめてのバリ旅行で、M氏は約3週間ウブド近郊の村に住むこの家族とともにガムラン音楽を学んだ。その後も短期の旅行でバリを訪れ、この年の後半にはデンパサールの芸術大学に留学した。滞在地はウブドであった。この家族と親交を深めたM氏は、一家の次男と1998年に結婚した。結婚の前後にはバリ芸能のワークショップやコーディネーターなどの仕事に携わったが、バリ芸能を深く知るようになるにつれて、それを教えたり伝えたりすることの難しさも感じるようになった。出産に前後する時期には、ブティックを開き、衣服の作成販売を手掛けた。比較的軽い気持ちではじめたビジネスであったこともあり、2002年のクタでの爆弾テロ事件後には2号店を閉め、1号店も2005年に閉めた。

M氏は、年に1度程度は日本に帰っていたが、2005年に、ひとり息子を日本の幼稚園に通わせるために、夫をバリにおき、子とふたりで日本の実家に帰った。「子どもを1年間幼稚園に入れて、この5歳前後の時期にしっかりと日本語を覚えさせたかった。この時期にやっておくと、一生身につくから」。そして予定通り、約1年後にバリに戻った。「日本に長く行っていたので、帰ってこないのではないかと思う人もいたようだが、私はもともと日本に住む気はないし、バリですずっと暮らすつもりであった」。日本では、はじめの2カ月でもうバリに帰りたい、帰ろう、と思ったが、親も、もうすこしがんばれ、こんなに長くいるのは今回だけなんだから、あとは長くバリに住めるんだから、と励ましたという。夫は、自身のガムランチームの公演のため、その年に来日した。子どもは、父との生活が再開してうれしそうだったという。M氏自身、夫と離れて精神的にたいへんで、日本からバリへの電話代だけでバリに戻れるくらいの金額になったという。子どもは、バリに戻ってすぐはバリ語をすっかり忘れていたが、その後ふたたび話すようになった。

M氏の夫は、友人の勧めもあり、日本で彫金の仕事を覚え、日本からの注文をバリで受けて3年ほどこの仕事を行ったこともある。ただ、本来の仕事は絵描きである。ガムラン奏者でもあり、多彩な芸術家である。夫の父や兄も芸術家であり、一家が村の行事の芸術に重要な役割を果たしている。夫は、夜中に創作をすることがおおく、朝寝て昼や夕方起きる。夫の得意なジャンルは、ヒンドゥー・仏教の神話や叙事詩をモチーフにした宗教的絵画である。

M氏の子どもは、就学前はバリ語中心の生活であった。しかし、通学するようになると、やがてインドネシア語にも慣れ（学校はインドネシア語中心である）、成績もあるときから急速に上がり、M氏も夫もほっとした。「そのときはひと山越えた感じだった」という。

M氏は「もし自分が日本にいたら、いまの夫と結婚していたとしても、離婚してしまっていたと思う。バリにいるから、こうして一緒に暮らしていけるんだと思う」「日本の家に帰っても、居場所がなく落ち着かない。でもバリに帰ってきて、[夫の屋敷にある]自分の建物にいと、本当に落ち着く」と述べる。2005年の日本滞在の際、M氏が応援するプロ野球の阪神タイガースが優勝した。大好きな阪神の優勝という、とてもすごいことがあったにもかかわらず、やっぱりバリに帰りたいと思った、という。「ここまでいいことがあったのに、帰りたいという気持ちがあった」

ことに、あらためてM氏は自身のいわばバリ愛とでもいうものを再発見した。

その後、M氏の子どもが日本の学校に行きたいと強く希望したので、日本の中学・高校に通うことにし、M氏はインドネシア語の通訳翻訳士をしながら、ふたたび日本の実家を生活の拠点とする生活に入った。その間は、子どもの学校の休みなどを利用し、1カ月前後の短い期間、バリに帰っていた。2019年3月に子どもが日本の高校を卒業し、親子でバリに戻った。その前年の日本でのインタビューの際、M氏は「これでようやく [日本での暮らしから] 釈放される」と表現していた。

M氏は、夫の実家に心底居心地のよさを感じるが、それだけではなく、バリの気候や、バリ人あるいはインドネシア人との人間関係にも心地よさを感じるという。「バリのあの家は安らぎのホームであるが、それはウブド、バリ、そしてインドネシアに広がっている。バリ人やインドネシア人という、人があってこそそのホームだと思う」と述べる。

ひとつのエピソードがある。2000年代前半に、M氏は、デンパサールでバリアン (balian; 占い師/呪術師) にみてもらったことがある。すると、そのバリアンは、あなたの夫は創造的な仕事をしており、家族全体が芸術などに関わっているね、といった。たしかに夫の家族は芸術一家である。そして、今後あなたがやるべきことは夫を支えることである、そのために夫の祖先の霊があなたをこの家に招いたのだ、といった。実は、M氏は、大学卒業後すぐにウブドでの滞在をはじめ、バリが好きで、バリ人である夫と結婚したが、自身はガムランや踊りが大好きというわけでもなく、なぜこれほど心地よくこの家で暮らしているのか、不思議に感じていた。しかし、この託宣を聞き、だから自分はバリにいるのか、だから夫の家にいると居心地がいいのか、と腑に落ちたという。M氏は、音楽と絵画に秀でた才能をもつ夫がバリ内外での演奏や行事に行く際の書類の作成も、夫の代わりにすべて行う。夫は、俺のおかげでお前は何でもできるようになったとうそぶいている、という。

子どもの中学・高校生活のために日本で長期滞在をはじめた中、バリに短期で戻ったとき、M氏は聖別化したプランキラン (plankiran; 簡易な祠) を日本の家に持ち帰った。バリでは頻繁に儀礼があったが、日本ではそれがなく、何か物足りない感じであったからだという。気候や家族とともに、儀礼あるいは宗教も、M氏にとってはバリでの暮らしが心地よいと感じられる重要な要因である。日本では、夜寝る前、毎日ヒンドゥーの祈りをしてきた (cf. 吉田 2000, 2021c)。花や聖水は使わないが、ときどき酒をささげていた。これはいわば自己流である。祈りの際は、まずバリ語のマントロ (mantra; 呪文/真言) の最初の一節を唱え——夫の母が、このはじめの一節だけでとりあえずよいと助言してくれた——、そのあとは日本語で、今日も無事に過ごせてありがとうございます、明日もまたいい日でありますように、よろしく願いいたします、といった趣旨の祈りをささげていた。これも自己流といえる。

近年の状況について述べる。M氏は、2019年9月に「軽い気持ちで」会社を立ち上げた。通訳をしながら通訳以外に何かできることがあるとずっと考えていたことが、その背景にある。前年に日本政府が創設した「特定技能」在留資格は、受入れ機関にたいして外国人へのサポートを義務づけるものであった。M氏は、個人として通訳翻訳士をしながら、この特定技能の登録支援機関——受入れ機関 (企業等) から委託を受けて、一定の専門的知識やコミュニケーション能力を必要とする支援を行う——となる法人をつくり、インドネシア人のサポートに携わろうと思いついたのである。

しかし、そこにコロナ禍が到来した。通訳の仕事は、2020年2月以降急激になくなり、3月～4月はすべてキャンセルとなった。その後も、通訳の仕事はなくなった。しかし、幸いにも、さまざまな人に助けられ、立ち上げた法人は、すこしずつ仕事を軌道に乗せていき、コロナ禍を乗り切

ることができた。

新たな会社の業務を通して、自身とインドネシアとの関係性はすごく変わった、とM氏はいう。ネットワークや人間関係が、ほとんどバリ外のインドネシア人中心になっていったのである。ジャワをはじめとするムスリムのインドネシア人に加えて、2022年後半からはカトリックのおおい東インドネシアから看護師らを日本に迎え入れることになり、来日前の基礎学習をバリで行うようにもなった。とくに東インドネシアとつながるようになって、バリ（そしてジャワやスマトラ）をこえて、インドネシア人との関わりがさらに広がったと実感している。「いままで何十年もインドネシアと関わりはあったが、それは一部であったと感じる。知れば知るほど、インドネシアが好きなんだな、という気持ちにもなる」。また、バリはかなり特殊なところであるということもあらためて思うと同時に、でも、自分はやはりバリが好きで「バリのよさもさらにわかった気がする」という。

M氏は、自身と同時期にバリ人と結婚し、バリに住むようになった日本人女性について、たがいにほんのすこしの生活や選択の違いが、やがてだんだんと開いていって、それぞれかなり違った人生になっているように感じている。また、そうした違いは、子どもの生き方についても当てはまるのではないかと考える。たとえば、子どもを公立の地元の小学校に通わせ、バリ人と一緒に学び遊ぶようにするのか、あるいは、外国人子女がよく行く私立の学校に通わせ、バリ人的なライフスタイルとは異なる方向性に子どもを向かわせようとするのか。親が子どもの生き方を当初選択するが、その選択によって、おなじ日本人とバリ人のハーフであっても、その子どもたちの人生はだんだんと違ったものになっていくように思われるのである。先述したように、M氏の子どもは地元の小学校に通った。M氏はそれでよかったと思っている。子ども——といってもすでに成人であるが——は、バリの家に帰れば、周囲の村人がバリ人として、地元の子として、みてくれるからである。たとえ中学・高校を日本で過ごしていたとしても、バリに帰ればバリ人扱いなのである。自分も子どもも、夫の家の人間として、バリで生きていつか茶毘に付されることに、M氏は想いをはせている。

以上のように、M氏は、大学を卒業して間もなくバリに留学し、バリ人と結婚し、バリをホームとする生活に入ってしまった。バリの芸術や文化に強く惹かれたわけではなく、どういった具体的な理由でバリに心地よさを感じ、ここを居場所とするようになったのかは、M氏自身にとってもやや謎といえるところがあった。B氏やC氏とは異なるが、M氏と夫の生活や仕事も、何度かの転機を経ている。2000年代半ばと2010年代には、子どもにとっての環境を第一に考えて、日本の実家という、M氏にとってアウェイの生活をしばらく送った。この間、M氏は短いバリへの帰還を年に何度か繰り返すことで耐えた。また、2020年に入ると、コロナ禍により、そもそも自由な往来や滞在ができない状況になった。ただ、その直前に立ち上げた特定技能制度をサポートする会社の業務は、子離れの時期にあると認識していたM氏に、新たな生活の局面を切り拓き、インドネシアへの思いを更新しかつ強化する契機を提供するものとなった。M氏は、2022年後半から、頻繁に日本とバリそしてインドネシア各地を行き来するようになった。ただ、M氏には、夫とその家族や実家という確たるホームがウブドにある。M氏は、このかけがえのないホームを携えつつ、コロナ禍をくぐり抜けて新たな仕事に向かい合っている。

(6) N氏

N氏（2022年末現在63歳、独身、男性）は、現在日本で生活しており、すでに20年以上バリを訪れていない。バリあるいはウブドにできるだけ長く滞在したいが、資金が切れるなどで日本に帰らざるをえなくなり、ふたたびバリにやってくる計画をもちながらもそれが果たせずにいる、とい

うタイプのひとりとして、彼を取り上げることにする。

旅行が趣味のN氏は、国鉄の職員であったが、分割民営化の際に退職を余儀なくされた。その後は、日本で1年ほど働き、半年ほど海外旅行に出掛け、資金が尽きると日本に戻ってまた働いて資金を貯める、という生活を繰り返した。

1993年、すでに世界40国以上を旅していたN氏は、台湾からオーストラリア経由ではじめてバリに入り、ウブドを訪れた。台湾で知り合った日本人から、ウブドがいいと聞いたからだという。そして半年のバリ滞在期間のほとんどをウブドで過ごし、バリ人や中長期滞在する日本人との間に交友関係を築いていった。踊りや絵画を習ったりするわけではなく、散歩や食べ歩きをしつつ友人関係や情報網を拡大・深化させ、ときには友人とともに行動するという、気ままな過ごし方をした。2度目のウブド来訪は1995年であり、それ以降は、半年バリに滞在し、半年ほど日本でアルバイトをして100万円強を貯めるという生活を、2000年まで繰り返した。1993年のときも含め、特定のビザをもたない通常の観光者の滞在期間は最長2ヶ月であったので、半年間の間に2度シンガポールに出国しすぐ戻った。ずっとウブドにいても退屈なので、たまにシンガポールに出ることはよかった、とN氏はいう。当初は民宿暮らしであったが、途中からは友人となったバリ人の営む下宿やその家に部屋を借りるようになった。

1995年の滞在の際には、間借りするなど世話になったバリ人宅に、バロンとランダの神像（ただし御霊入れはしていない）を寄贈した。N氏自身は、バリの宗教や芸術に特段の関心があるわけではなかったが、日本人長期滞在者である友人の助言を受け、村への寄付という趣旨でこのような贈り物をしたのである。購入総額は30万円弱程度であったという。居候をした別のバリ人宅に冷蔵庫を買うなど、ウブドにおけるN氏の暮らしぶりは質素なものであったが、友人たちにはある種の気配りをしていた。

N氏は、90年代半ばから、周囲の日本人やバリ人にも感化され、自分もバリで起業しようと、アイデアを温めはじめた。たこ焼き屋やうどん屋を日本人と共同で営むというものもあったが、単独でのビジネスを目指すというものもあった。ひとつは、構造的にも形状的にもユニークで根強いファンもおおい、ヴェスパのオートマチックタイプのバイクを揃えて、観光者向けのレンタル業を営む、というものである。もうひとつは、定番であるバリ発1泊2日のボロブドゥール行きツアーに、中部ジャワにある汽車博物館（Museum Kereta Api）でのSL乗車体験を組み込んだ、鉄道ファン向けのオリジナルツアー商品の開発と運営である。インドネシア語と英語ができるN氏自身が案内役をつとめ、日本あるいは他国の鉄道好き観光者に、山道でのSL乗車体験（しかも好みの車両を選択できる）という世界でもまれな体験旅行を提供する、というものである（cf. 古賀 2014: 137-142）。



写真4-10, 4-11 N氏が友人宅に寄贈したバロン（左）とランダ（右2体）

こうした企画を練る中で、しかし、N氏は、2000年に日本に戻ってからは、すぐのバリ行きは見送り、1年半ほど貯金をして、2002～3年に中南米を半年ほどかけて旅行した。N氏がこれまで繰り返してきたウブドでの断続的な滞在をいったん中断し、別天地に久しぶりに向かったのは、お金を貸したが返却されなかったり、嘘をつかれたり、居候していた友人宅で重要な物品がなくなったり（N氏は盗まれたと理解する）、いくつかの不愉快なことが重なったからであった。N氏は、しばらく冷却期間を取ろうとしたのである。しかし、ふたたびバリ行きを考えていたN氏は、その後、海外旅行自体を見送らざるをえなくなった。両親の体調がおなじ時期から悪くなったのである。両親の介護をひとり自宅で引き受けることになったN氏は、日帰りで旅行や外出をすることはあっても、家を空けることはできなくなった。父が認知症となったことがおおきな理由である。旅行好きのN氏にとって、つらい生活がつづいた。そして、10年余の介護の末、2016年2月に父は亡くなった。遺された母の介護のために、N氏は現在も家を離れることはできない。

N氏がはじめて訪れた外国はスイスであった。居心地がよいホームと思うのはスイスである、とN氏はいう。スイスには4回、いずれもバリ来訪以前に行った。スイスでの永住ビザ取得を検討したこともある。スイスは居心地がよかったが、外国人扱いされることについては違和感を覚えた、一方そうした違和感はバリではなかった、という。ただ、「バリがホームという感覚はない。バリは稼いで暮らすところである」。N氏はこれまでバリで稼いだことはないが、ジャワでのSLツアーやウブドでのたこ焼き屋開業などの計画をいまでも温めているN氏は、未来に向けてバリあるいはウブドをそう位置づけているのである。N氏は、ウブド在住の友人たちがSNSにアップする各種の情報やメッセージにまめに目を通しコメントし、ウブド発信のウェブ上ラジオ番組を聴いてきた。C氏の中米行き前に日本で開催されたパーティーにも出席した。このように、N氏にとって、バリとそこで得た友人は、いまでも大切なものである。

2017年のインタビューの際に、母の介護から解放されたらまずどこに行きたいか、と訊くと、N氏は即座にバリだと答えた。N氏にとって、スイスは観光者として訪れたい安らぎの地なのであろう。ただ、スイスは物価も高く、そこにずっと暮らしていくことは難しい。一方、バリは、N氏にとってかならずしも居心地のよい面ばかりではないが、自身が今後どこでいかに暮らしていくかを考えたとき、人間関係・言語・経済面などさまざまな観点から、バリが有力な選択肢となるのであろう。N氏にとって、バリは、いやなこともあったが、そこで生きていくことができる実感できる場所であり、おそらく日本よりも有力な未来の居場所の候補地なのである。2022年11月のインタビューでも、そうした考えに変わりはなく、SNSのやり取りでは「バリ島で老後は悠々自適」という文言もあった。ただし、18年間親の介護をつづけるN氏の未来のホームは、いまはまだ確定していない。

以上をまとめよう。1990年代のN氏は、日本で半年ほど黙々と働いて100万円強を目安に貯金し、これを半年間ウブドに滞在して消費しつつ、ここで繰り広げられる日本人やバリ人の人間模様や人間関係の中に自身も加わって過ごしていた。ウブドでの生活こそN氏のいわば陽の部分であり、日本での生活はそれを支える影の部分であったといえる。N氏は、バリの宗教文化や芸能あるいは自然や動植物などに、とくに強い関心をもっていたわけではない。たまに友人らと儀礼・祭礼・芸能の見学に出かけることはあったが、それも、そうした人々が織りなす日々の活動の広がりの中に自身の居場所をもとめ、そこに居心地のよさを感じていたからであろう。その点では、N氏にとってのホームはウブドという観光地ではなく、そこに展開する人間関係の束にこそあったように思われる。もっとも、これは20年以上も前のことである。その後のN氏は、バリ再訪を果たせずにいる。ひとりで親の介護をすることになった自宅は、N氏にとっては安らぎのホームとはいえないもの

であろうと推察するが、その中でN氏は、バリを未来のホームとみるまなざしをしっかりと保持しているのである。

(7) 日本人移住者の生の広がり

以上、5人を事例とし、彼ら日本人移住者のウブドでの生の一端を記述した。ここで、詳細な記述を見送った人々について、すこし触れておきたい。

拙論では（吉田 2013b: 244-250）、バリでビジネスをはじめたものの、現地人ビジネスパートナーの詐欺にあったというケースや、結婚を予定していたものの、婚約者に当たるバリ人から一方的に別れを告げられたといったケースに触れた。ほかにも、結婚後に夫の金銭問題からバリでの生活を断ち切ったというケースもある¹¹。信頼していたパートナーの裏切りを契機にウブドでの生活を断念するという日本人移住者は、私の見聞する範囲では決しておおくない。ただ、さまざまな事情によって、ウブドというホームをもとめても得られない人々、相対的にはアウェイである日本の地でふたたび暮らすという選択をせざるをえなくなった人々は、一定数いる。N氏はそのひとりであり、彼以外にも、ウブドに数年滞在したが本格的なビジネス開始にいたらず、資金切れによって日本に帰国した者、店舗をもつウブドと生活拠点たる日本それぞれに半年ずつ滞在する生活を10年以上つづけたものの、バリでの生活費の高騰などからこうしたダブルホーム状態を維持できなくなって日本に撤退した者、リタイアメントビザを取得しバリでの暮らしを10年以上つづけたが、コロナ禍前に日本に戻った夫婦、そして、営業不振がつづきコロナ禍中に賃貸契約期間が終了し、20年以上つづけた店舗をいったんたたんだ者らがいる。

一方では、コロナ禍前の時点から、意識して観光の外にビジネスを展開していたQ氏やR氏の例もある（吉田 2019b: 96-97, 2020a: 283）。また、コロナ禍中の2021年に新たに中長期滞在者向けアパートメントの開業に踏み切った者（夫はインドネシア人）もいる。すぐに顧客が埋まることは見込めないとしても、いち早くSNS等で情報を流し、デジタルノマド的な滞在者など、今後かならず訪れる需要を先取り喚起しようとしたのである。こうしたポストコロナ期を見越した動きも、日本と同様、一部にはある。

第1節では、ほとんどバリ人のようにウブドに暮らす日本人移住者もいるという点に触れた。そうした人々の生活もやはりさまざまである。家や集落の行事に積極的に関わり充実した生活を送る者もいるが、現地人向け食堂などでパートタイムの仕事し、収入を補う者もいる。中には、仕事に習熟していないためにバリ人パート従業員よりも安い給料で働く者もいると聞く。観光者を相手にしたビジネスから疎遠な生活を自ら選択し、バリ人的なライフスタイルを長く送ってきたことが、結果的に、職業労働に従事する上でやや裏目に出ているのである。

ほかに、N氏と同様の経験をしたのちに、念願のウブドでの暮らしをはじめた者もいる。彼をT氏とする。T氏（2022年末現在76歳、男性、独身）は、10年以上にわたってタイ旅行を繰り返したのち、1990年代半ばからウブドを頻繁に訪れるようになった。しかし、その後、親の介護を引き受けたため、十数年間バリにまったく来ることができなくなった。母が亡くなり、身辺整理をしたのち、70歳となった2016年から、彼はウブドでの新たな移住生活をはじめた。

¹¹ ある日本人女性は、バリで数年働く中でウブドを気に入り、ここで暮らしたいと望んだ。その後、出会ったバリ人男性と結ばれ、ふたりは観光者向けの店舗を開業した。バリでの生活は順調であったが、開業後10年を経たころ、夫が彼女に内緒で借金をしており、返済のめどが立たないほどの額であることがわかった。夫への信頼感を失った彼女は、夫に一切告げず、子どもを連れて出国するという決断をした。彼女は、ウブドあるいはバリで暮らしたいという強い思いをもっていたが、いずれ確実に訪れるであろう破局の前に、夫・住まい・店舗そしてバリを捨てるという苦渋の選択をしたのであった。

このT氏を念頭におき、ひるがえってN氏にふたたび戻るならば、N氏は移住者そして観光者の周縁に位置する存在であると捉えることができる。序章で論じたように、そうした存在をも視野に取り込み、観光の主体や観光という社会現象を拡張して理解する可能性を探究することこそ、本研究の意図するところである。

この観点から、ウブドの日本人移住者のライフスタイルの広がりをおぼろげに確認しておきたい。彼らの中には、観光者として来訪する経験を重ねてウブドでの定住を決意した者もいれば、当初から日本の外に新たな居場所をもとめた者もいる。この地で自ら生活資金を稼ぐ必要のない者もいれば、その必要に迫られる者もいる。途中で経済状況が変わった者もいれば、生活資金獲得の方途を見つけられずに日本に帰国した者もいる。バリ人と結婚し、家族とソリッド・ホームにずっと暮らしていく将来像をもつ者もいれば、そうした安定したホームをバリに持ちながらも、日本とバリの間で生活の拠点を切り替えながら、過渡期のホームたる日本に暮らした経験をもつ者もいる。また、事例として記述はしなかったが、バリ人配偶者との離別や離婚を経験し、バリを離れる者もいれば、離別や離婚後もバリで生活をつづける者もいる。一度はバリを終の棲家とする決意を固めても、諸般の事情からそうした決意が流動化する経験をする者もいる。彼らの生のあり方は、さまざまであるとともに、バリという観光地の社会状況によって比較的短い期間の中で変わりもする偶有的なものである。本節で取り上げた5人の事例は、そうした多様な広がりの中にある、それぞれに具体的なかたちをとった顕在化形態なのであって、潜在的には別様でもあった可能性をもつものとして、理解されなければならない。

では、以上を踏まえ、次節で議論をまとめることにしよう。

第4節 安らかならぬ楽園に生きる

本章の議論を総括する。第1節では、「リキッド・ホーム」を生きる／生きざるをえない現代人と、その生き方の一端としてのライフスタイル移住という、2つの視点について整理した上で、本章の記述対象を絞り込んだ。第2節では、バリやウブドの近年の変化について概観した。それらを踏まえ、第3節では、観光地ウブドに生きる／生きてきた日本人5名の暮らしぶりの一端に関する民族誌的記述を行った。その記述からは、楽園観光地ウブドの変化とそこに暮らす日本人の生のゆらぎをうかがい知ることができる。彼らの生のあり方は、現代の日本やバリの社会過程の中にあるとともに、潜在的には別様でもありえた偶有的なものである、と捉えうる。また、とりわけC氏・M氏・N氏の事例からは、いま住んでいる場所がかならずしも本人の希求するホームとはかぎらない、またそもそも希求するホームは確定的ではなくつねに変わりうるという、現代人のリキッド・ホームの具体的なあり方を確認することもできる。

あらためて振り返れば、この1990年代から現在にいたる時間の経過の中で、ウブドをホームとして生きる日本人にとって予期せぬ出来事が次々と生じたことがわかる。1990年代、バリそしてウブドの観光は右肩上がりの状況にあった。この流れを受けて、ウブドに移住する日本人と彼らが経営する店舗が増加していった。そうした中、1997年にインドネシア通貨危機が起こった。スハルト体制が崩壊し、その後数年の体制移行期を経て民主化が進んだことは、彼らにとって予想しなかったプラスの出来事であったろう。もっとも、通貨ルピアの極端な下落によって、当初のライフスタイルに変更を迫られた人々もいたが(吉田 2019b: 96-97)。さらに、2000年代後半まで、爆弾テロ事件、SARS、鳥インフルエンザ、スマトラ沖地震と津波などがつづき、バリ観光は回復してはダメージを受けるという一進一退状況を迎えた。2000年代末にはそうした不安定な状況から脱し

たが、その後は地価や物価の高騰、ウブドに来る日本人観光者の減少など、彼らの予測をこえた変化が顕著になっていった。そして、2020年にコロナ禍がバリをも襲い、外国人観光者が2年にわたってほとんど来訪しなくなるという、バリの大衆観光化がはじまって以来の危機的状況が到来した。

このコロナ禍に直面する前の段階、観光地ウブドはおおむね持続的な発展傾向の中にあった。しかし、中小規模経営の集積体である観光地ウブドにおいて小規模経営の観光ビジネスを営む日本人たちは、決して先行きを楽観視していたわけではなかった。とくに2000年代に観光に打撃を与える出来事が繰り返す中で、観光業が抱えるリスクに自身が直面したり不安感を抱いたりした人々はおおかった。観光ビジネスに携わらない日本人移住者、たとえばリタイアメントビザを取得しおもに年金で暮らす人々にとっても、物価の高騰はおおきな打撃であり¹²、ウブドで暮らしていくことの不透明感は大半の日本人移住者に共有されていたと考えてよい。

中には、拙論で触れたように（吉田 2019b: 96-97）、明日のわが身は「お先真っ暗」と自虐的に語りながらも、短期的な資金繰りの困難や生活の不安定性に耐えることをある部分で楽しんでいるかのように見える日本人移住者もいる。その一方、A氏のように、当初からほぼ一貫して楽園ウブドでの暮らしぶりが変わらなかった者もいる。また、そもそも、ウブドの日本人移住者は、未来に希望をもったからこそ楽園バリでの暮らしを選んだのであって、ウブドにおける自らの暮らしの不安な面だけに向き合ってきたのではない。ただ、総じて、彼らの現状や未来にたいする認識は次第に厳しいものになっていったと考えられる。たとえば、1990年代からウブドで中長期滞在を繰り返したのち、身辺整理をしてウブドに移住したある日本人女性（2022年末現在60代、独身）は、2019年のインタビューの際、ウブドで中長期滞在を経験した／している幾人かの日本人の現状について語ったあとで、「以前のようにバリに長く旅行で滞在してからここに住もうという日本人は、もう出ないんじゃないかな」と述べた。21世紀のウブドは、日本人ライフスタイル移住者にとって「安らかな楽園」から「安らかならぬ楽園」へと変質したのである。

ルーマンによれば、リスクは自己生産的なものであり、リスクを回避し安全を高める努力や選択がかえって（思わぬ）リスクを招く可能性がある（Kneer & Nassehi 1995(1993); 小松 2003; Luhmann 2007(1986), 2014(1991); 山口節 2002: 164-175)。この点からすれば、日本での生きづらさから、居心地のよい楽園ウブドへの移住を決意した者にとって、こうしたリスク回避のためのホームの再選択は、当初の時点では思ってもみなかった出来事の連鎖によって、別のリスクとなって跳ね返ってきたといえる。さらに、今日の日本人観光者が、心身のリスク軽減のひとつの手段たる楽園観光の目的地としてウブドやバリをあまり選択しなくなったこと、そしてそれが集積・蓄積していくことが、ウブドで日本人を主要な顧客としてビジネスを営む一部の人々にとってのさらなるリスクの増大へと、再帰的につながっている。序章では、バリ島の周縁的な観光地の周縁的な観光主体としてウブドの日本人移住者を取り上げる、と述べた。1990年代から2000年代半ばあたりまで日本人が訪れる代表的な楽園観光地のひとつであったバリ島は、今後ますますその存在感を低下させ、日本人にとって周縁的な観光地になっていく可能性もある。

リスク社会の中に生きる現代人は、生活圏のかなたに存在する「楽園」に癒しをもとめて訪れる。心身の健全さの維持やリフレッシュのための余暇活動としての観光には、新規の観光地や新規

¹² C氏は、1990年代には贅沢しなければ月2万円ほどで生活できたが、2010年代に入ると生活するのに5万円程度は必要になった、と述べたことがある。円やドルにたいするルピア安の傾向は通貨危機以降も持続したため、ルピアで考えれば物価の上昇はそれ以上ということになる。インドネシアで随一の国際的観光地であるバリの物価高騰はとくに顕著なものがあり、首都ジャカルタを凌駕する局面もある。

の観光施設こそ、魅力的なものに映る。それゆえ、いまも世界の各地では、あらたな観光地が開発され、既存の観光地においてもさらなる自己との差別化のための再開発や新たな施設の建設が進められている。楽園観光地ばかりではない。さまざまなタイプの観光地や観光スポットが、世界中で生み出され、コピーされ生産されている。しかし、現代の観光地がおおかれすくなかれ同質のシミュラークルに依拠し、差別化の困難さを抱えたものである以上（序章第2節）、観光の発展と俯瞰的にみられる現象は、個別の観光地の停滞・低迷のリスクと微視的にみられる現象を表裏一体に伴っている、と考えなくてはならない。

この点で、予期せぬ社会変化や事態の推移に翻弄されるのは、ウブドに暮らす日本人に固有の事柄ではない。観光地社会バリに生きるバリ人はもちろん、日本で暮らす日本人も含め、そのことは世界リスク社会の中に生きるすべての人々に大なり小なり当てはまる。「日本人としてウブドに生きる」というアンビヴァレントなライフスタイルが、「日本人として日本に生きる」や「バリ人としてウブドに生きる」といったライフスタイル以上におおくのリスクを抱えるものであると、即断したり一般化したりすることもできない。ただ、本章で取り上げた日本人ライフスタイル移住者が、世界リスク社会の中であって観光依存体質を深める楽園観光地バリが抱える多重のリスクとその顕在化に今後も向かい合い、その時々を決断や答えを模索しつつ生きていくであろうことは、たしかである。それは、グローバリズムの中で翻弄されつつそれぞれのホームをもとめて生きる世界各地の人々と、何がしかのかたちでつながっている。